

城ヶ尾遺跡の再検討

—後期旧石器時代第Ⅱ文化層～第Ⅲ文化層の石器群を中心として—

馬籠亮道・長野眞一

A Reexamination of Jogao Site

Especially on the Stone Tools from 2nd and 3rd Cultural Stage of Late Paleolithic Period

Magome Ryodo, Nagano Shinichi

要旨

本稿では、霧島市福山町城ヶ尾遺跡の旧石器時代石器群について、従来整理が不十分であった石器群の重複を整理し、石器群の層位的変遷を再検討する。その結果、特に第Ⅱ文化層と第Ⅲ文化層では、角錐状石器・三稜尖頭器を主体とする石器群と小型ナイフ形石器群が層位的に分離され、これらの層位的な上下関係が確認された。また、角錐状石器の形態と石材利用に地域性がみられる点はすでに多くの研究者によって指摘されているところであるが(岩谷 1997, 萩原 1987 等)、本稿では角錐状石器の形態と石材利用について検討を行い、加えてリダクション・プロセスを評価することで、角錐状石器にみられる形態差が機能差を反映したものである可能性を指摘した。同時に、当該期の県内の資料を概観し、角錐状石器盛行期前後の石器群の変遷について予察を行った。

キーワード 三稜尖頭器、角錐状石器、小型ナイフ形石器、リダクション・プロセス

1 はじめに

筆者らは、2003年に鹿児島県霧島市福山町所在の城ヶ尾遺跡の報告書を執筆した(鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003)。城ヶ尾遺跡は鹿児島県霧島市福山町に所在し、国分平野に向けて流れる検校川水系と、宮崎県側へ流れる大淀川水系の分水嶺に近い位置に立地する。本地域は地理的に東九州と南九州をつなぐ位置を占めるだけでなく、地域テフラである P-15, P-17 等を介在しながら旧石器時代の石器群の変遷を層位的に確認できる、極めて重要な地域でもある。城ヶ尾遺跡では X V 層～X 層の間で合計 5 つの文化層が確認された。

その後、東九州自動車道関連で九養岡、桐木、桐木耳取遺跡などの報告書が刊行され、宮崎県側においても多くの調査成果が公表されつつある。それとともに、城ヶ尾遺跡の石器群についてもいくつかの言及がなされ、当該石器群について再検討を行う必要が生じてきた。その概要については既に別稿(馬籠 2005)で述べたが、本稿では再度基礎資料を提示し、前稿までに触れられなかった問題や新たな知見を折り込みながら検討を行いたい。

2 城ヶ尾遺跡の石器群をめぐる諸問題

城ヶ尾遺跡の石器群は、X IV 層主体の第Ⅰ文化層、X III 層主体の第Ⅱ文化層、X II 層主体の第Ⅲ文化層、X I 層主体の第Ⅳ文化層、X 層主体の第Ⅴ文化層に区分できる。X IV 層の下部と上部で燈色パミスが確認され、それぞれ P-17, P-15 に比定される。報告書刊行当時、遺物の上下移動を考慮して整理を行ったが、時間的制約等の諸事情から石材分類や接合作業が十分でなく、結果として各文化層の石器群の峻別や器種認定に課題を残した。

このうち、筆者らは既に、城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層中にナイフ形石器が「安定的に」存在するとした報告書刊行当時の見解は撤回した(馬籠・長野 2004)。

松本茂は、終末期のナイフ形石器を俯瞰する中で、城ヶ

尾遺跡第Ⅱ文化層～第Ⅳ文化層の石器群について、ナイフ形石器の形態的評価や上下移動の影響を考慮し、「本来的には第Ⅱ～第Ⅳ文化層の順に「角錐状石器石器群→終末期ナイフ形石器石器群→細石刃石器群」とする変遷も想定でき」と述べた(松本 2005)。

阿部敬は城ヶ尾遺跡の角錐状石器についてリダクションの影響を考慮し、当該器種の形態的バリエーションをリダクションの過程を示すものと論じた(阿部 2005)。

馬籠は、東九州自動車道関連遺跡の調査成果をまとめるにあたり、城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層が角錐状石器主体、第Ⅲ文化層が小型ナイフ形石器主体となる見通しを示した(馬籠 2005)。

さしあたっては、各文化層の組成の検討と、第Ⅱ文化層において豊富に組成される角錐状石器の製作技術と形態分類の検討が課題である。

なお、本稿では三稜尖頭器・角錐状石器、およびその関連資料については、当面、「角錐状石器」の呼称を用い、分類については前稿(馬籠・長野 2004)を踏襲する。九州地方においては、断面三角形を呈する資料が多く、伝統的に「三稜尖頭器」(橋 1975)の名称が使われる場合が多いが、本稿で対象とする資料には、橋の定義から逸脱する資料が含まれるためである。また筆者自身、同一の名称を与えられているこれらの石器群について、異なる機能を備える別器種として再分類することを含め、検討の必要性を感じているからでもある。

角錐状石器の分類については、リダクションによる石器の変形に言及した阿部の指摘もあるので、その問題を整理した上で検討する。まずは以上のような論点を踏まえながら、再度基礎資料の提示を進めたい。

3 各文化層の石器群について

各文化層のエリア配置状況を第 1 図に示した。

第Ⅰ文化層はD-3区(第Ⅰエリア)とB,C-4区(第Ⅱエリア)に主たる分布域がある。

いずれのエリアも、やや節理が発達する暗緑色～薄緑色の珪質頁岩を主体とする。第Ⅱエリアには台形石器と切出形のナイフ形石器が含まれるが、これらは同一の石材を利用している。石材利用面からみれば、一括性の高い石器群と評価できる。上層との平面的重複は少なく、ほぼ独立した石器群と判断できる。

第Ⅱ文化層はXⅢ層を主体とする石器群である。XⅡ層を主体とする第Ⅲ文化層と分布が重複し、両文化層の石器群は再検討が必要である。

第1図から、第Ⅱ文化層と第Ⅲ文化層の各エリアの分布には、複数のエリアで平面的な重複関係が確認できる。両文化層の主な利用石材は黒曜石Ⅰ類、黒曜石Ⅱ-A、Ⅱ-B、Ⅱ-C類、黒曜石Ⅲ類、頁岩、玉随である。

このうち、頁岩については報告書中に十分な分類を反映することが出来なかったため、主要なものについてここで新たに定義しておく。母岩識別の精度にはおよばないが、おおむね石器群の石材利用傾向を抽出するには十分である。

なお、肉眼的特徴から同一母岩と考え得るものについては特に注記する。

頁岩Ⅰ類：茶褐色～黒灰色を呈する緻密な頁岩で節理はほとんど発達せず、全体的に均質なのが特徴である。宮崎県平野部で多用される緻密なホルンフェルス(松田 2005)に対応する可能性が高い。色調によって細分した。

I-A類：茶褐色系の色調を呈するもの。

I-B類：黒色系の色調を呈するもの。

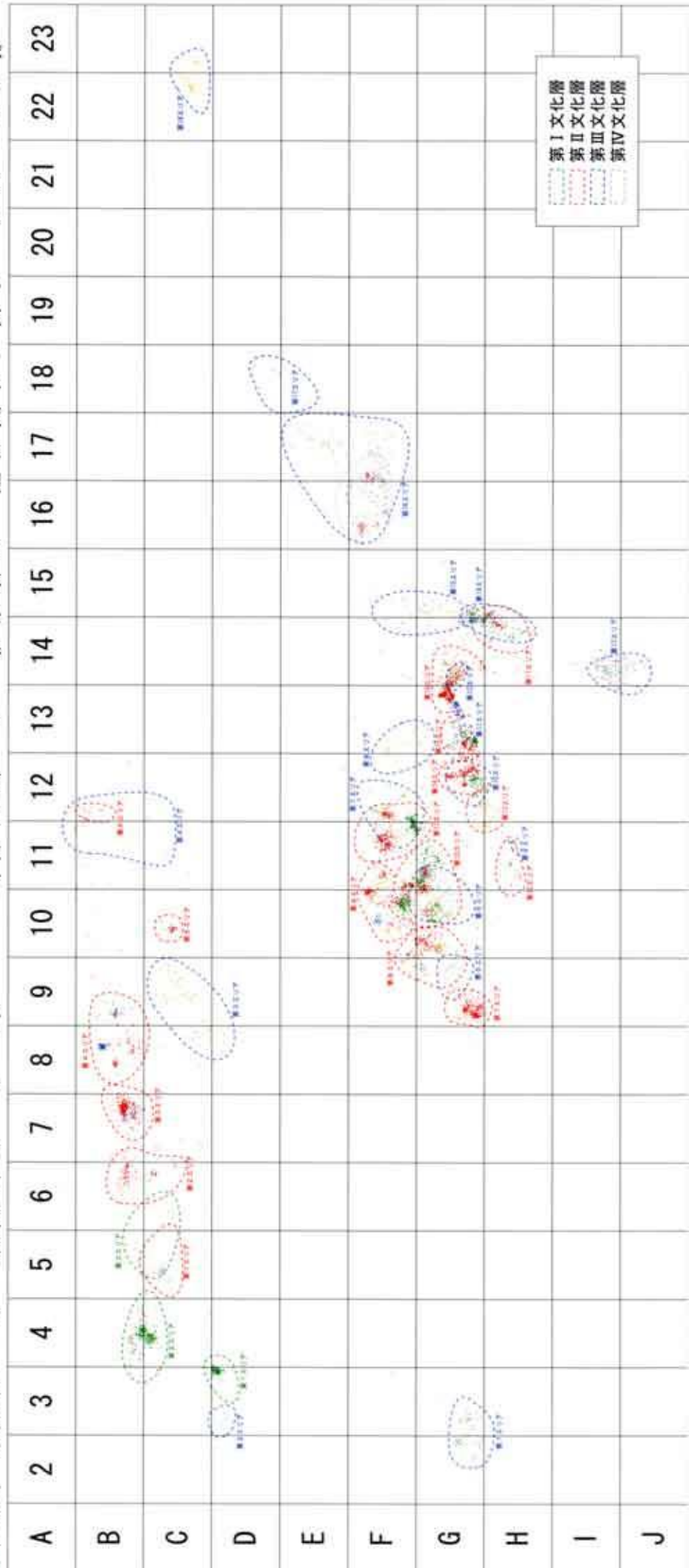
頁岩Ⅱ類：節理のやや発達する淡緑色の頁岩でやや白く風化し、珪質を帯びるものもある。

頁岩Ⅲ類：やや節理の発達するホルンフェルス系の石材で雑多な石材を含む。

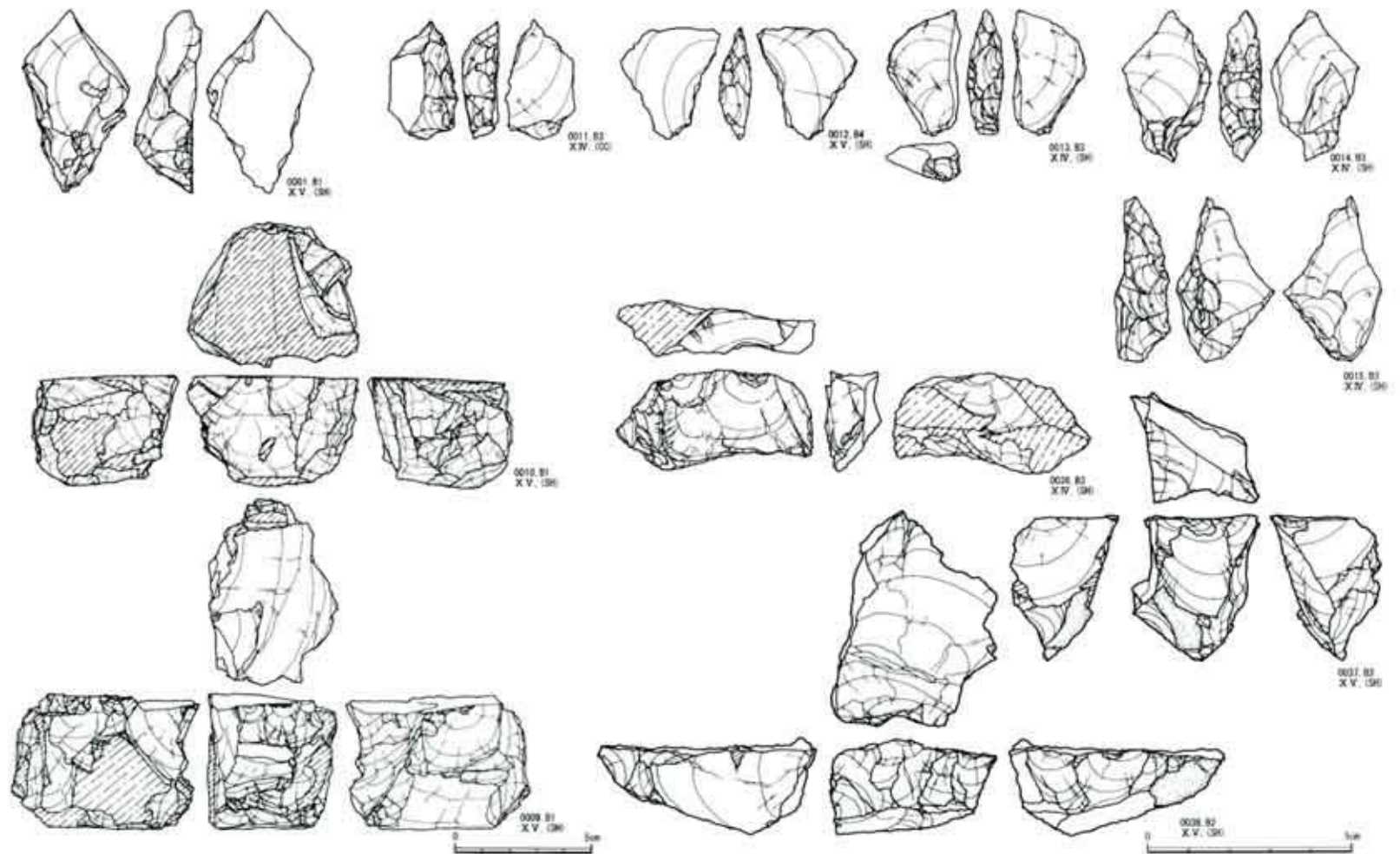
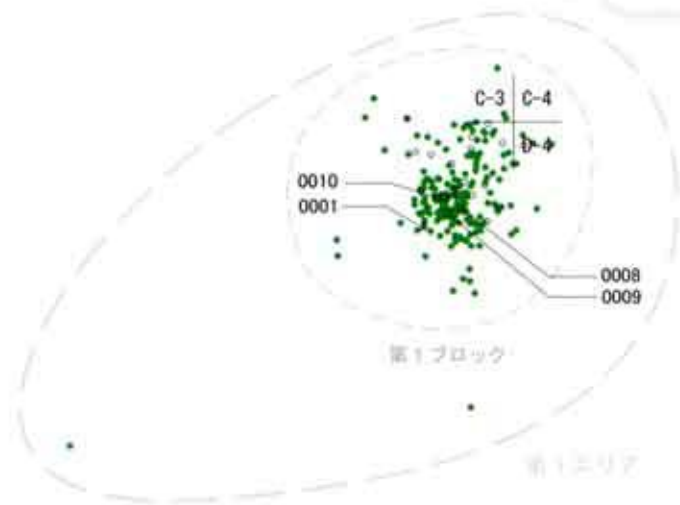
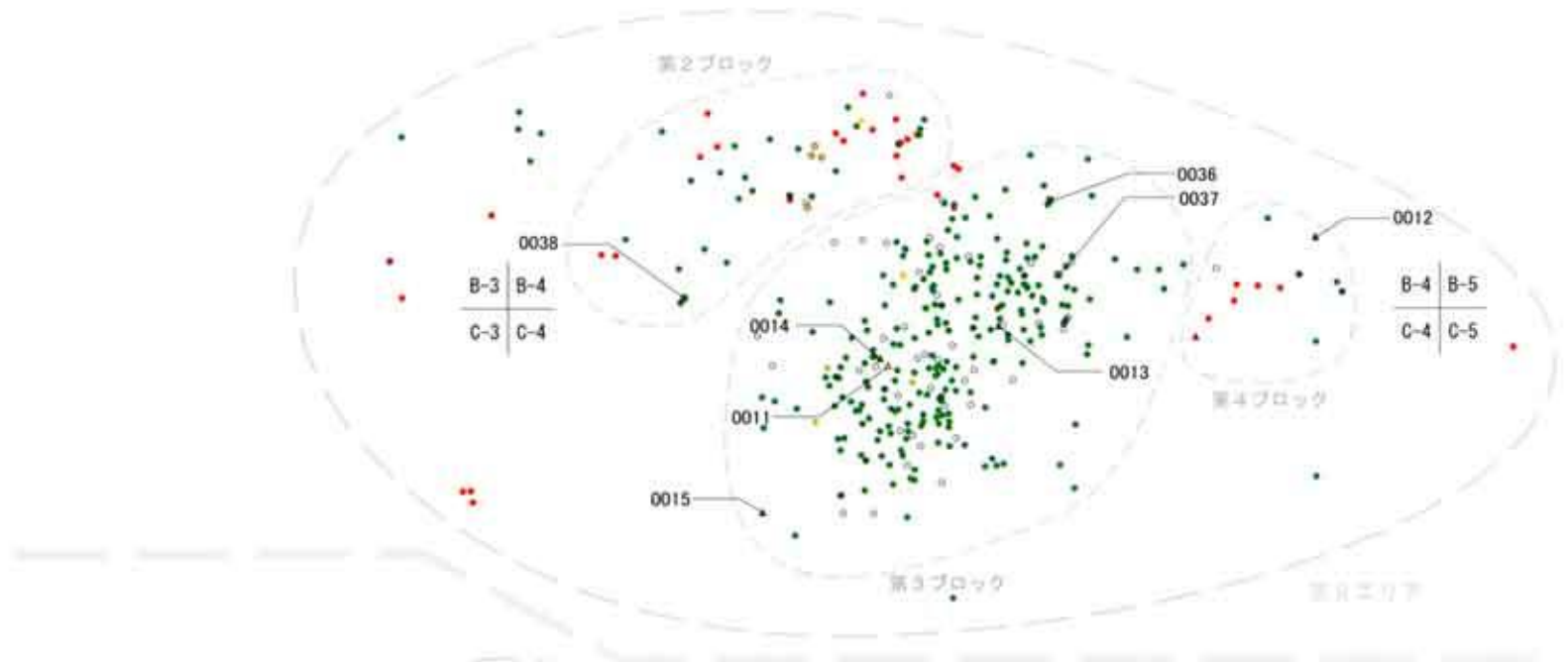
報告書中に掲載した文化層と自然層位の対応関係を抽出するために、平面的に重複する上下の石器群を比較する。なお、検討の対象は角錐状石器とナイフ形石器に絞った。石核や剥片等については適宜参照することとする。

①第Ⅱ文化層第10エリア,第Ⅲ文化層第6エリア(第3,4図)

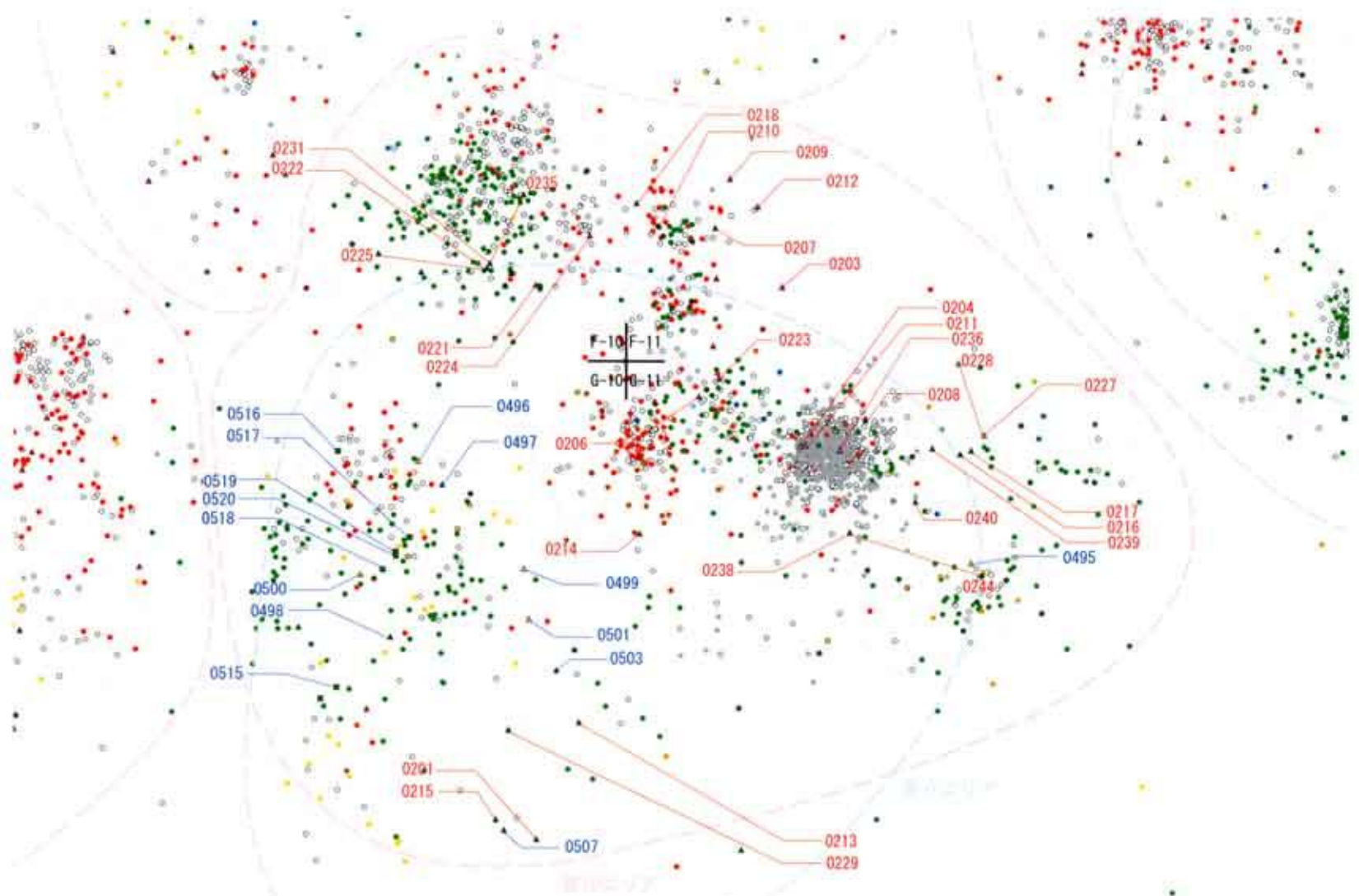
第Ⅱ文化層第10エリアの石器群は、角錐状石器と台形石器を中心とする。報告書刊行後に239+240, 238+244, 231+235, 227+228が接合した。角錐状石器, 台形石器はXⅢ層からの出土資料が多い。角錐状石器には黒曜石Ⅱ-A類(209,212,224, 接合No.35等), Ⅱ-B類



第1図 城ヶ尾遺跡第Ⅰ～第Ⅳ文化層エリア配置図



第2図 城ヶ尾遺跡第I文化層出土石器及び石器出土状況



第3図 城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層第10エリア、第Ⅲ文化層第6エリア石器出土状況

(211,236), Ⅱ-C類(223), 頁岩Ⅰ-A類(213,216), 頁岩Ⅰ-B類(218), 頁岩Ⅱ類(222+225,23+244,231+235), 頁岩Ⅲ類(239+240,229)が使用される。その他に台形石器(204,206), 大型の側縁加工のナイフ形石器(214,215,217), 国府型ナイフ形石器関連資料(207,210)がある。台形石器204は黒曜石Ⅱ-B類で角錐状石器211,236と、台形石器206は黒曜石Ⅱ-C類で角錐状石器223と同一母岩である。また大型の二側縁加工ナイフ形石器215は頁岩Ⅰ-A類を素材とし、角錐状石器213,216と同一母岩である。

角錐状石器をみると、全般的に石材と形態がよく対応する。黒曜石を素材とするものは比較的短身で寸胴なものが多く、頁岩を使用するものは逆に比較的細身で大型のものが多い。形態との関連で考えれば、黒曜石Ⅱ類が角錐状石器Ⅱ類に、頁岩Ⅰ類が角錐状石器Ⅲ類に、頁岩Ⅱ類が角錐状石器Ⅰ類におおむね対応する。

エリア内には黒曜石Ⅱ類、頁岩Ⅱ類の調整剥片が豊富に残されており、活発な石器製作が行われたことを示唆する。一方で頁岩Ⅰ類については調整剥片があまりみられず、石器製作の痕跡は希薄である。黒曜石Ⅱ類や頁岩Ⅱ類における製作の途中で破断したと考えられる資料(211,236,231+235,239+240等)は、このような状況を裏付けるものと理解できる。

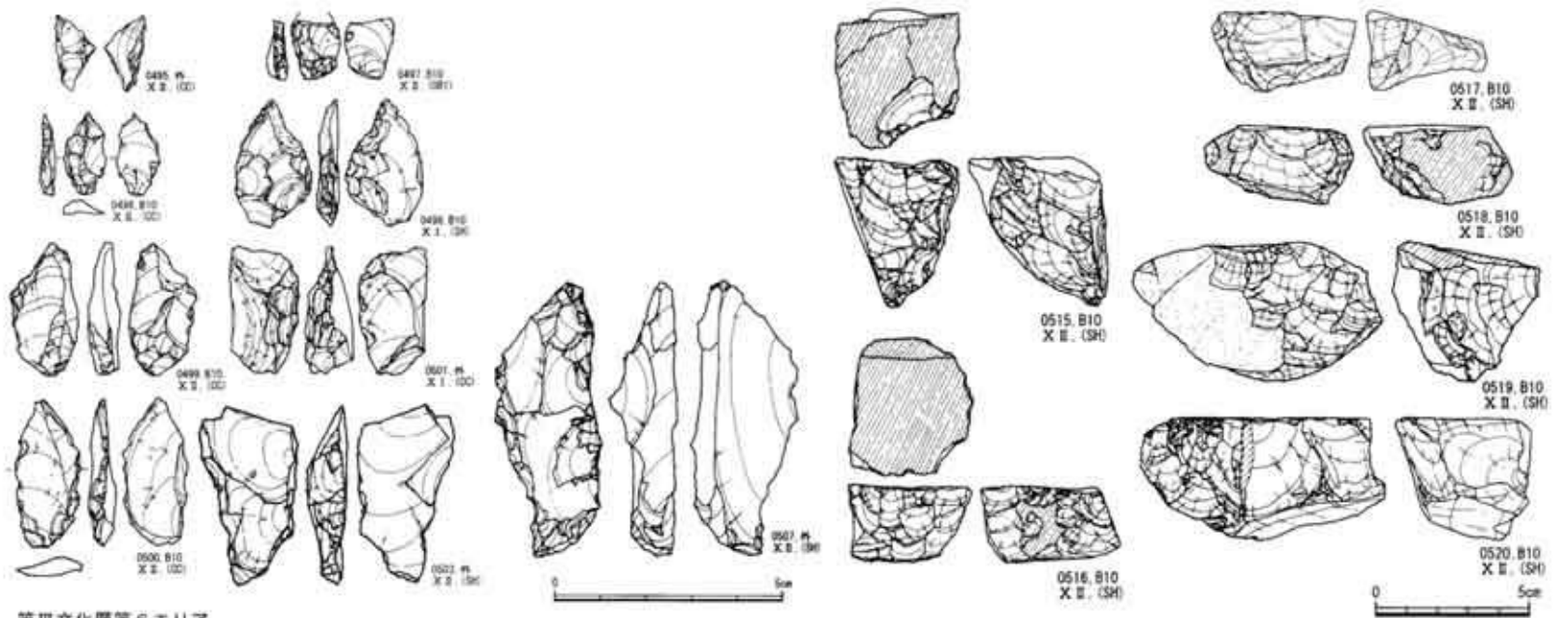
第Ⅲ文化層第6エリアは、ほとんどが玉随、チャートのナイフ形石器で占められる。498は下層のXⅢ層

で使用される頁岩とは異なり、石材的に下層との関連を見いだすことは出来ない。逆に507は頁岩Ⅰ-A類を素材とし、大型の側縁加工のナイフ形石器として形態的にも石材的にも第Ⅱ文化層に位置づけられる。また、515,516,518,519,520等の大型の石核はほとんどが頁岩Ⅱ類である。全てがXⅡ層出土であったため、従来第Ⅲ文化層の資料としてきたが、XⅡ層主体の石器群にこの石材を利用するものがほとんど見られないこと、平面的に重複する第Ⅱ文化層の角錐状石器関連資料と石材が共通することなどから、頁岩Ⅱ類の大型石核については、改めて第Ⅱ文化層に所属するものと評価しておきたい。

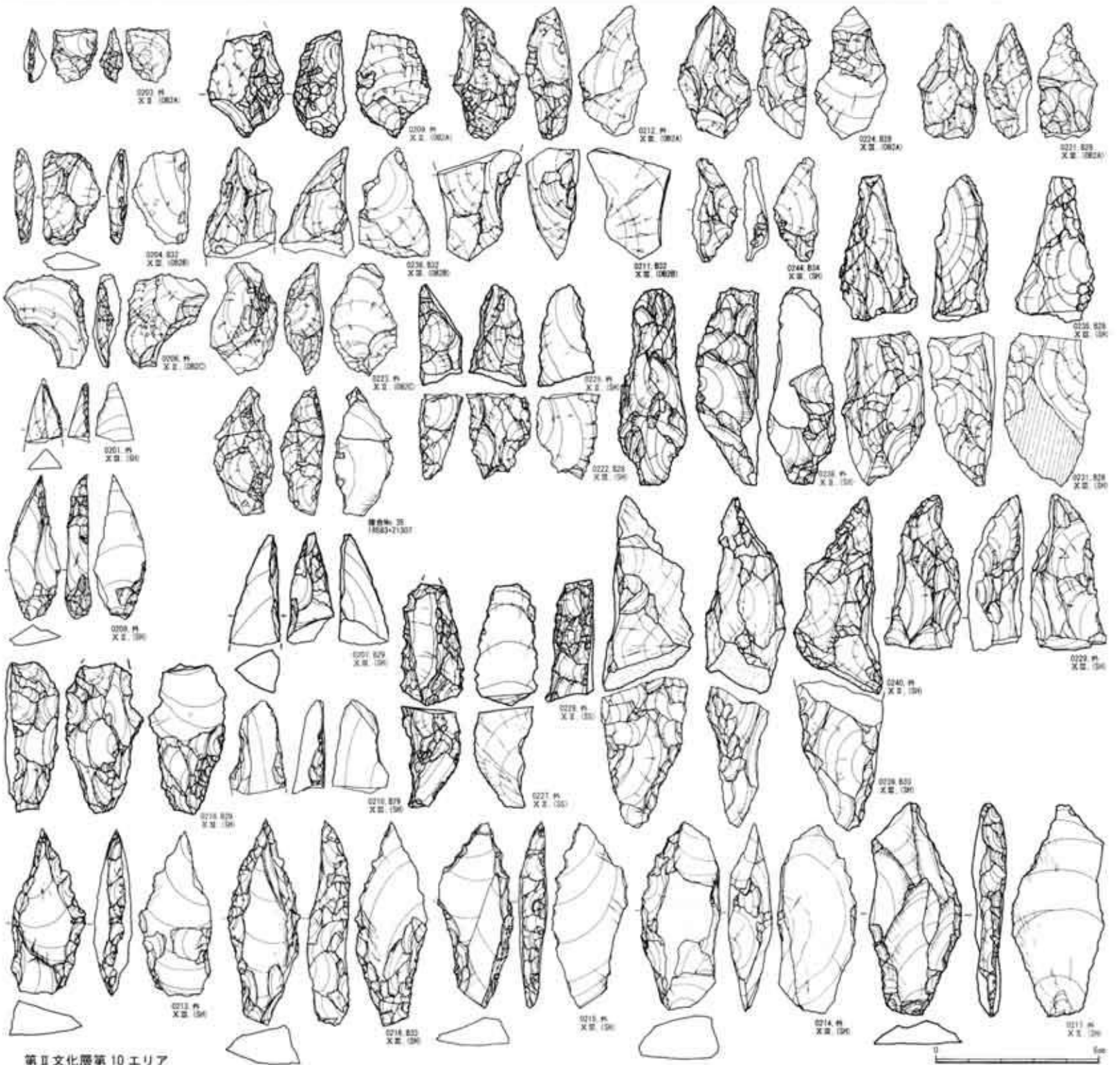
②第Ⅱ文化層第11エリア、第Ⅲ文化層第7エリア(第5図)

第Ⅱ文化層第11エリアは、黒曜石Ⅱ-A類と頁岩Ⅱ類を主体とする。285,286,287,288が黒曜石Ⅱ-A類、289,290が頁岩Ⅱ類である。279は砂岩質の頁岩である。283は珪質頁岩だが頁岩Ⅱ類とは別個体である。280は斑状に白く風化する黒色の頁岩である。形態的に529と類似し、第Ⅲ文化層に位置づけられる可能性もある。

角錐状石器は黒曜石Ⅱ-A類を素材とするものは比較的短身で寸胴なものが多く、先端部が欠損しているものが多い。これに対応するかのように先端部のみの破断資料がみられ、先端部との接合資料も観察される(接合No.87)。併せて285,287等は破断後に先端部に再加工を加えており、破断後も加工が一定程度継続していることを

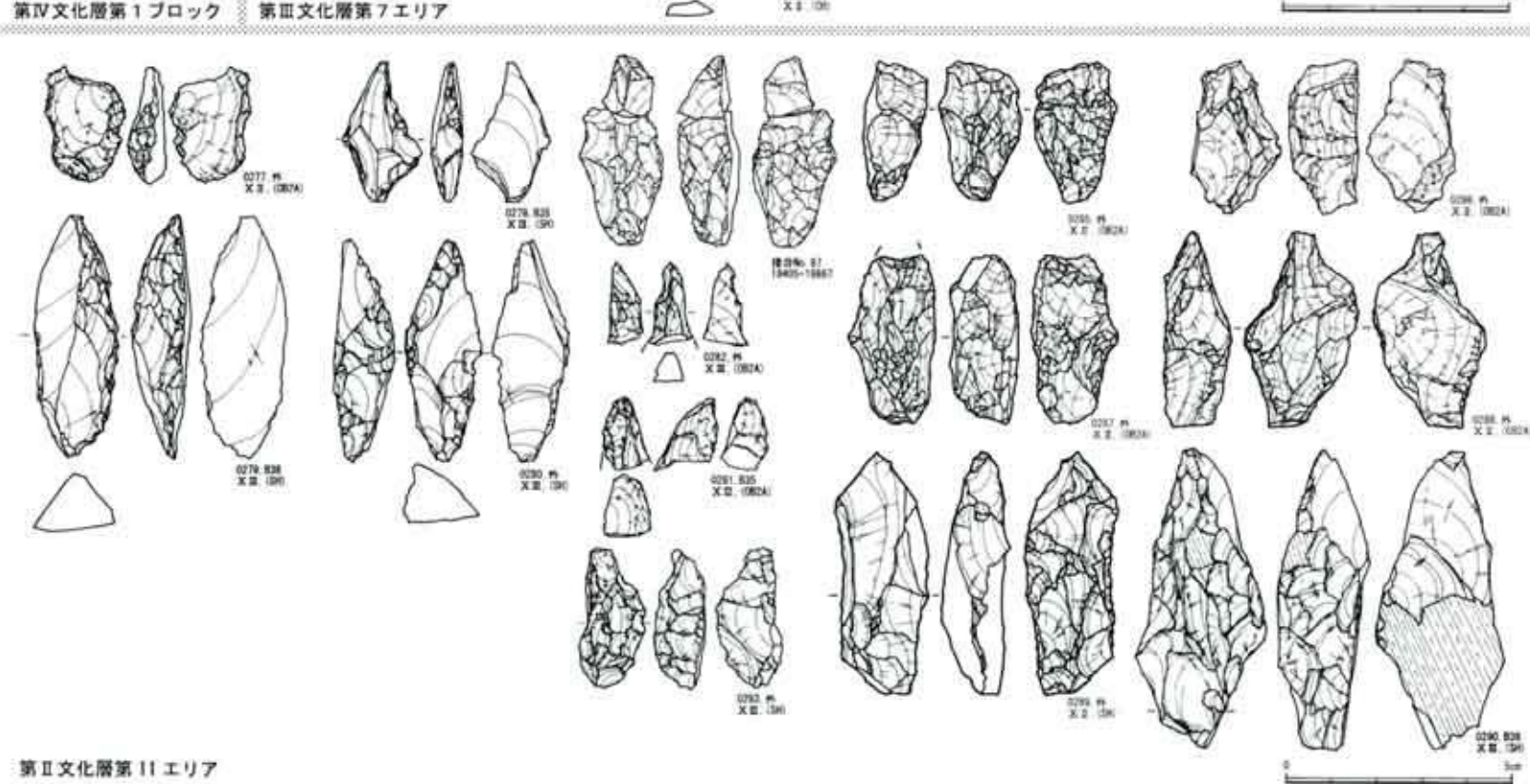
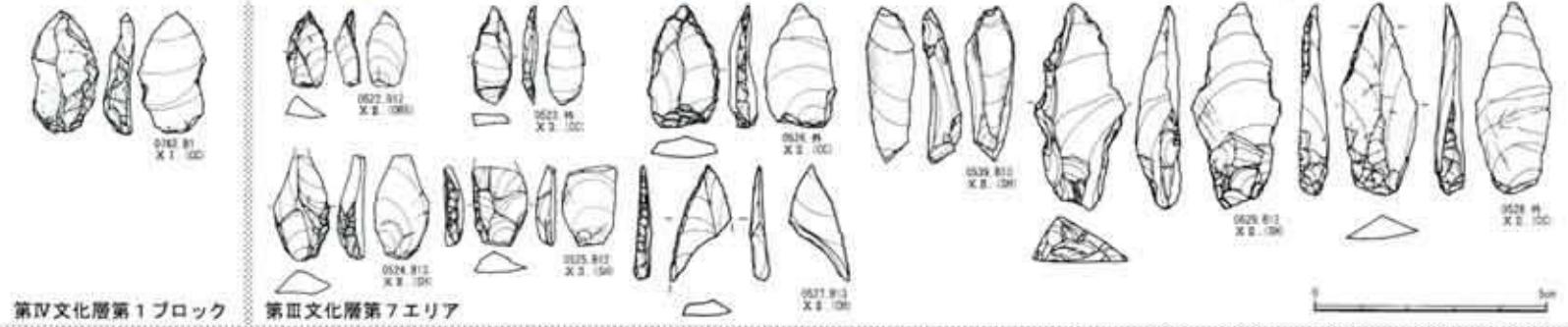
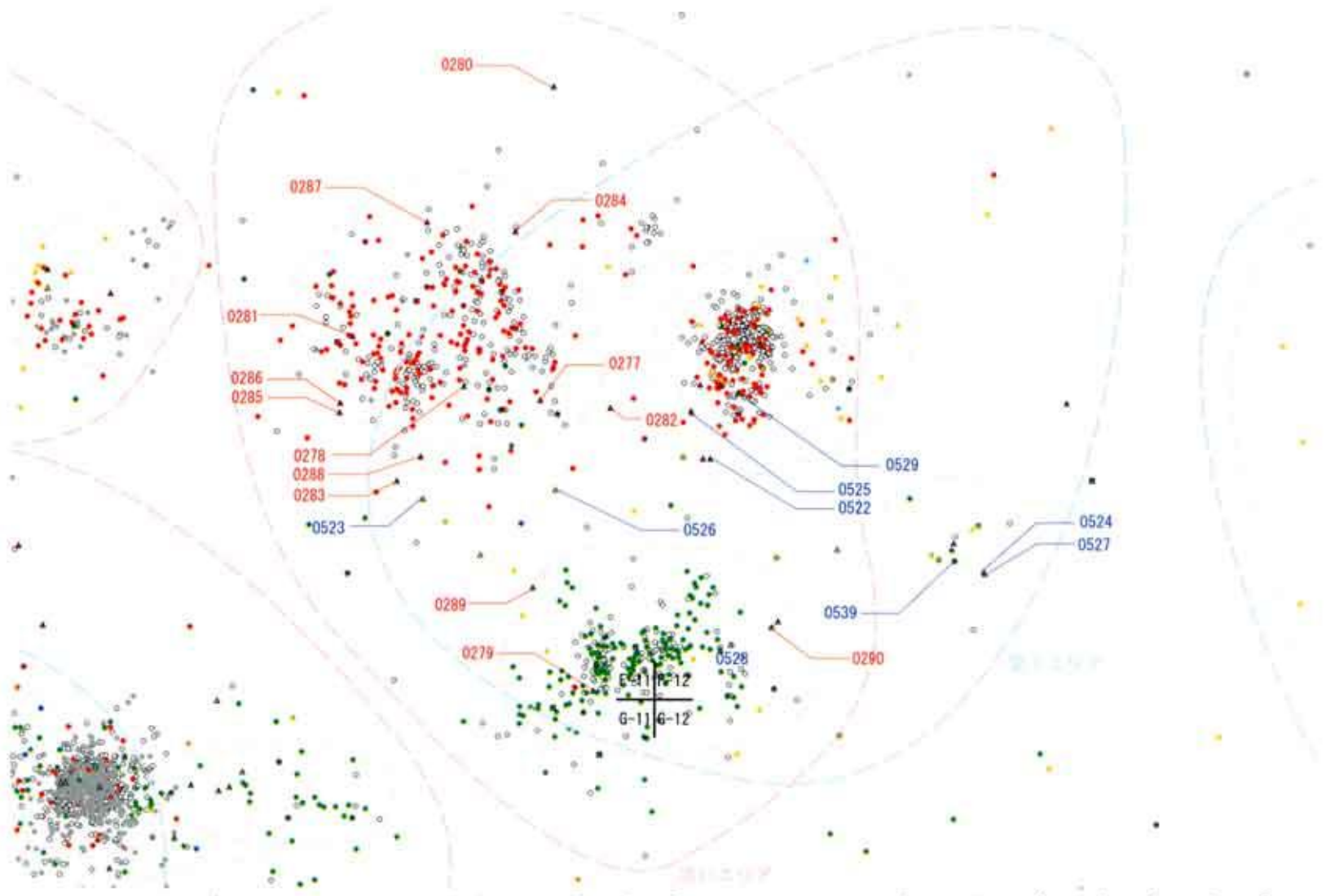


第Ⅲ文化層第6エリア

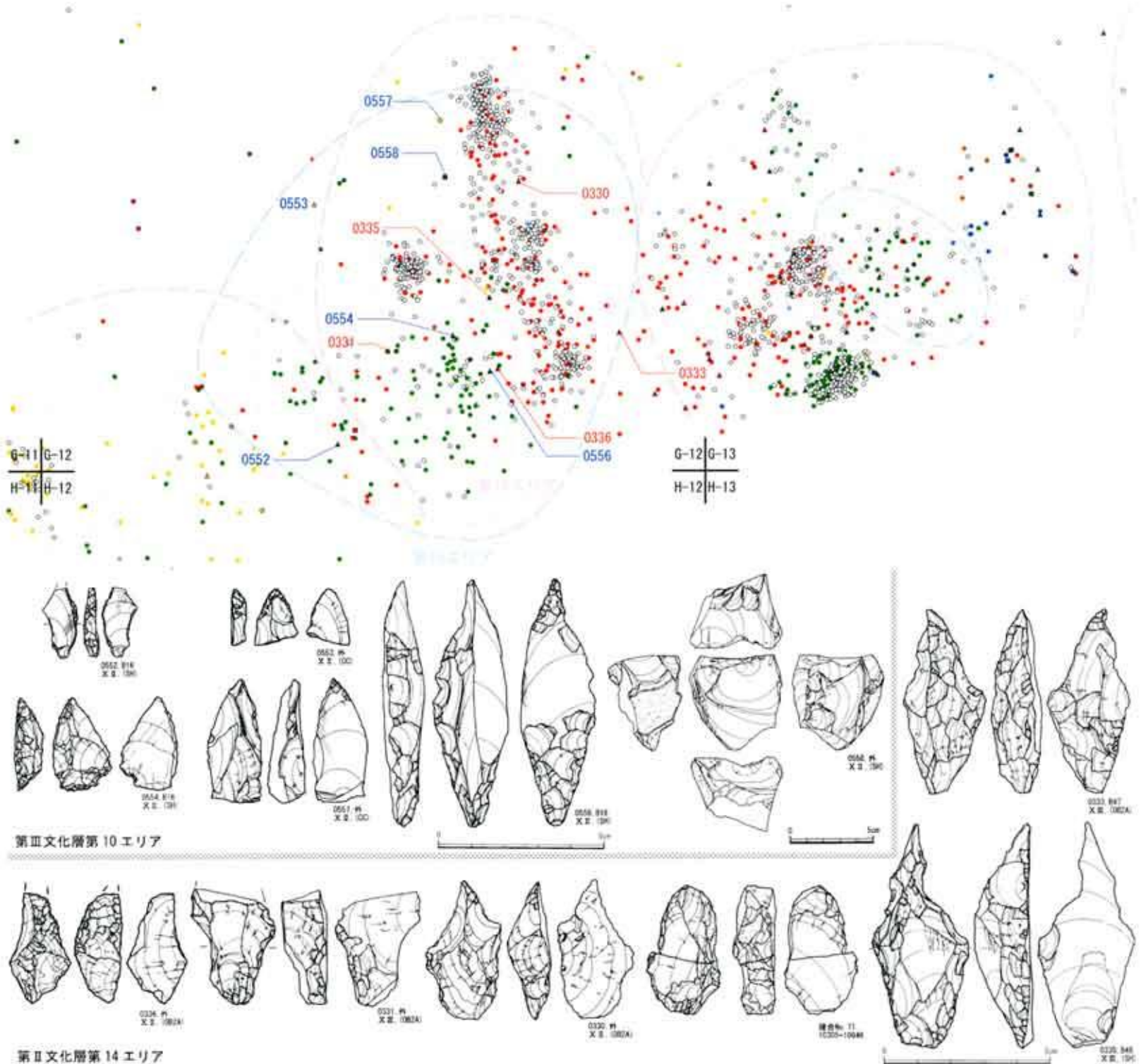


第Ⅱ文化層第10エリア

第4図 城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層第10エリア、第Ⅲ文化層第6エリア出土石器



第5図 城ヶ尾遺跡第II文化層第11エリア、第III文化層第7エリア出土石器及び石器出土状況



第6図 城ヶ尾遺跡第II文化層第14エリア, 第III文化層第10エリア出土石器及び石器出土状況

窺わせる。このことから黒曜石II類の製品については、石器生産だけでなく、維持管理行為も行われている可能性が高い。頁岩II類の289,290については整形が十分でなく、製作途上の資料と理解できる。

第III文化層第7エリアは基部加工のナイフ形石器、小型の角錐状石器からなる。チャート、玉髓、珪質頁岩を主体とする。石器形態の面からも、石材利用の面からも、下層の第II文化層第11エリアとはよく分離できる。

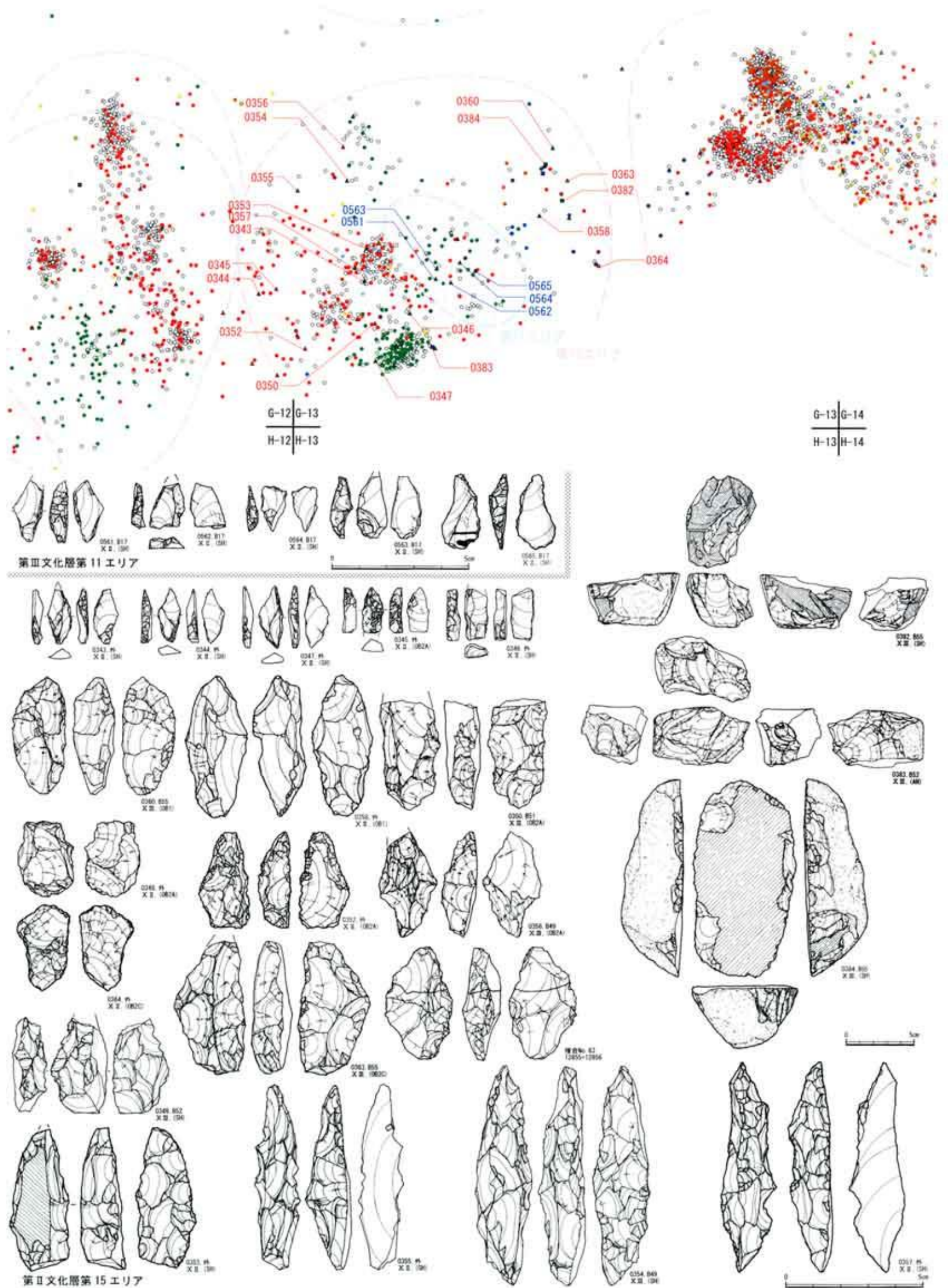
③第II文化層第14エリア, 第III文化層第10エリア(第6図)

第II文化層第14エリアは、角錐状石器を主体とする石器群である。330,331,333,336は黒曜石II-A類を、335は頁岩I-A類を素材とする。やはり石材と形態との結びつきが強く、黒曜石II類が角錐状石器II類と、頁岩I類が角錐状石器III類に対応する。エリア内には黒曜石II

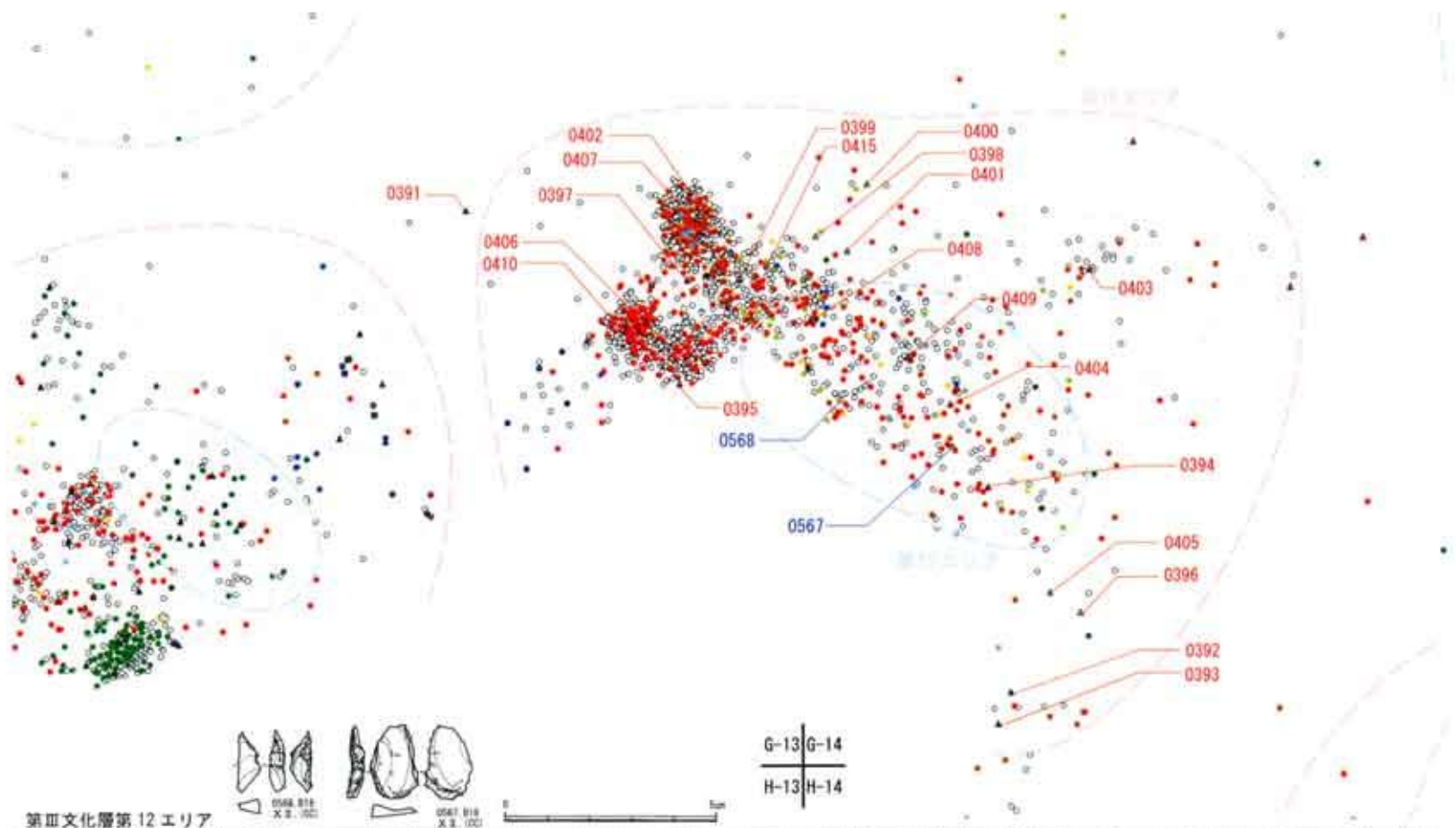
類の剥片類が多く観察され、活発な石器製作行為を示唆する。330,333,336等は先端部に細かい加工が集中している。特に330は大きな剥離の後に先端部に細かい剥離が観察できる。頁岩I類を素材とする335も先端部の一方が抉られるかのように調整剥離が進行しており、左右対称形よりも先端部の先鋭化を意識した印象を与える。第II文化層第11エリアと同様に、石器生産だけでなく石器の維持管理行為を指摘できる一群である。

第III文化層第10エリアは玉髓、頁岩製のナイフ形石器と頁岩I-B類を素材とする角錐状石器が含まれる。

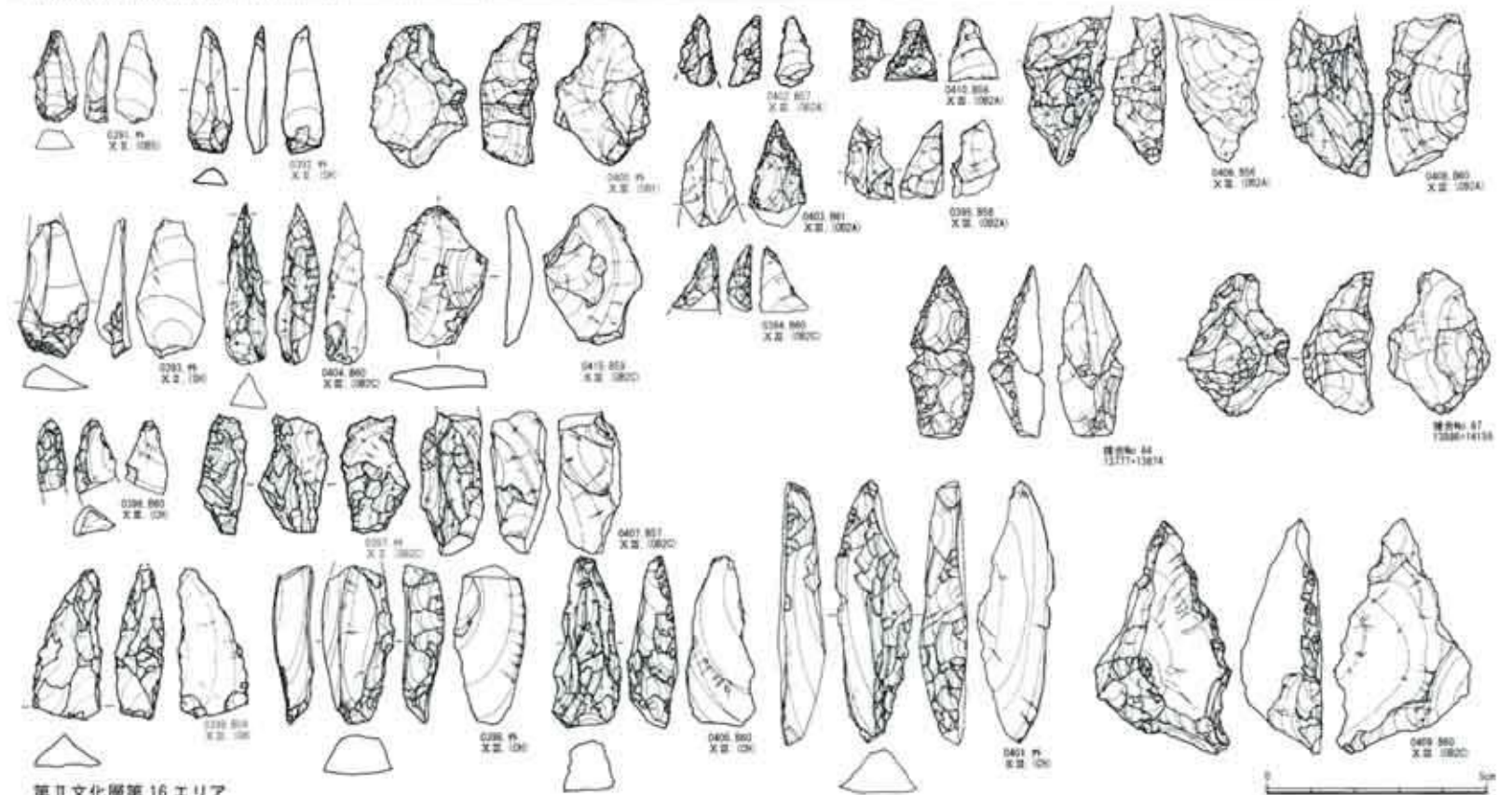
頁岩I-B類を素材とする角錐状石器(556)はXIII層出土の角錐状石器と共通点が多く、第II文化層に位置づけられる。558は頁岩I-A類の石核であるが、第II文化層の製品群に関連するかどうかは判断できない。



第7図 城ヶ尾遺跡第II文化層第15エリア, 第III文化層第11エリア出土石器及び石器出土状況



第Ⅲ文化層第12エリア



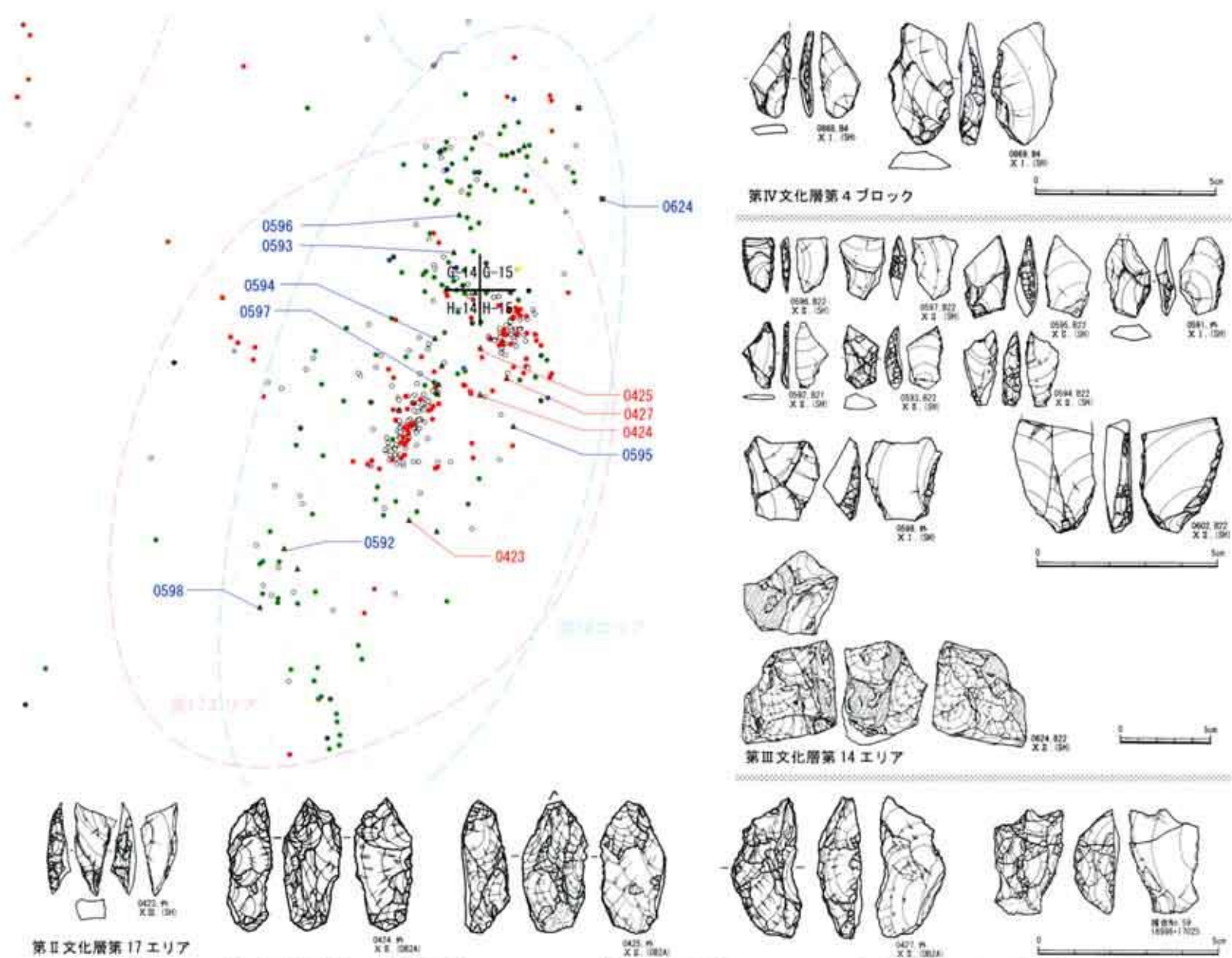
第Ⅱ文化層第16エリア

第8図 城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層第16エリア，第Ⅲ文化層第12エリア出土石器及び石器出土状況

④第Ⅱ文化層第15エリア，第Ⅲ文化層第11エリア(第7図)

第Ⅱ文化層第15エリアは，角錐状石器，台形石器，小型ナイフ形石器，搔器が含まれる。このうち，小型ナイフ形石器についてはほとんどがXⅡ層からの出土であり，上層の第Ⅲ文化層第11エリアの石器群と形態的にも石材的にも共通点が多い。従って，まず最初にこれらの小型ナイフ形石器については，上層の第Ⅲ文化層に位置づけられるべきものと判断される。角錐状石器は黒

曜石Ⅰ類(360,358)，黒曜石Ⅱ-A(350,352,356)，黒曜石Ⅱ-C類(363)，頁岩Ⅰ-A類(353,354,355,357)がある。やはり石材と形態の結びつきが強い。364は台形石器の範疇で捉えられ，角錐状石器363と同一母岩である。頁岩Ⅰ-A類を素材とする角錐状石器のうち，354,355,357はほぼ同一母岩と判断できる。382,383,384はいずれも頁岩Ⅱ類を素材とする石核(382,383)及びブランク(384)である。第Ⅲ文化層第11エリアは角錐状石器は組成されず，



第9図 城ヶ尾遺跡第II文化層第17エリア、第III文化層第14エリア出土石器及び石器出土状況

小型のナイフ形石器だけで組成される。石材は頁岩を使用するものが多い。

⑤第II文化層第16エリア、第III文化層第12エリア(第8図)

第II文化層第16エリアは、角錐状石器、国府型ナイフ形石器、台形石器を組成する。391,392,393は、XII層出土であり、石材や石器形態の共通性から、上位の第III文化層に帰属させるべきものと判断される。角錐状石器は黒曜石II-A類(406,408等)を主体とし、黒曜石II-C類(397,407等)や黒曜石I類(400)を客体的に組成する。先端部を欠損するものも多く、これに対応するかのように先端部の破断資料が多く検出されている。黒曜石I類を素材とする400や接合No.67は、先端部付近を大きく抉るような調整剥離の後、先端部付近に細かな剥離痕が観察される。404や接合資料No.64のような細身小型の資料は、類例が少なく所属文化層の判断が困難だが、石材や出土層位から第II文化層所に属するものと考えておきたい。この他に第II文化層第16エリアを特徴づけるものとして、チャートを素材とする国府型ナイフ形石器群の存在を指摘できる。周囲に調整剥片等が散見され、エリア内で何らかの調整加工を行っている可能性が想定

できるが、素材となりうるような剥片は確認できず、製品自体は遺跡外からの搬入品とみられる。

第III文化層第12エリアは玉随を主体とする石器群で構成される。器種は判然としないが、隣接する第III文化層第13エリアの小型のナイフ形石器と同一母岩であり、これらの関連資料と評価して良いようだ。

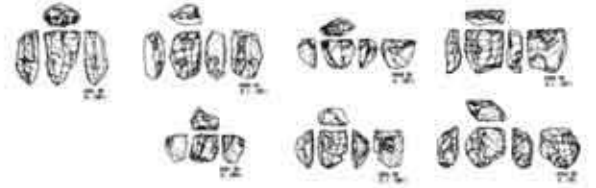
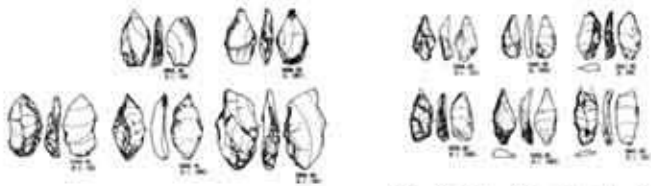
⑥第II文化層第17エリア、第III文化層第14エリア(第9図)

第II文化層第17エリアは黒曜石II-A類を素材とする角錐状石器を主体とする。小型のナイフ形石器(423)は上位の第III文化層第14エリアの出土資料との関連から、XIII層出土ながら第III文化層に所属する可能性が高い。黒曜石II-A類を素材とする角錐状石器は形態的には角錐状石器II類に分類されるものが多い。特に接合No.59は先端部からの調整剥離が極度に進行しており、この種の石器の最終形態を示す資料として注目される。

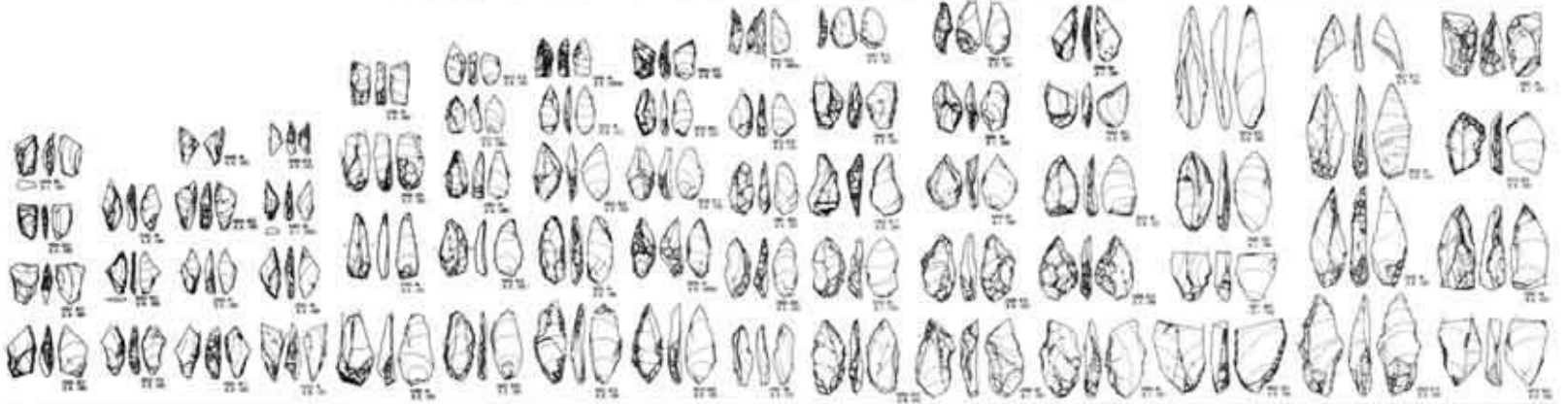
第III文化層第12エリアは小型のナイフ形石器、台形石器、基部加工のナイフ形石器等で構成される。頁岩II類を素材とする大型の石核(624)が含まれるが、これは他のエリア同様、第II文化層に位置づけられる可能性が高い。ナイフ形石器はいずれもチャートや硅質頁岩を素



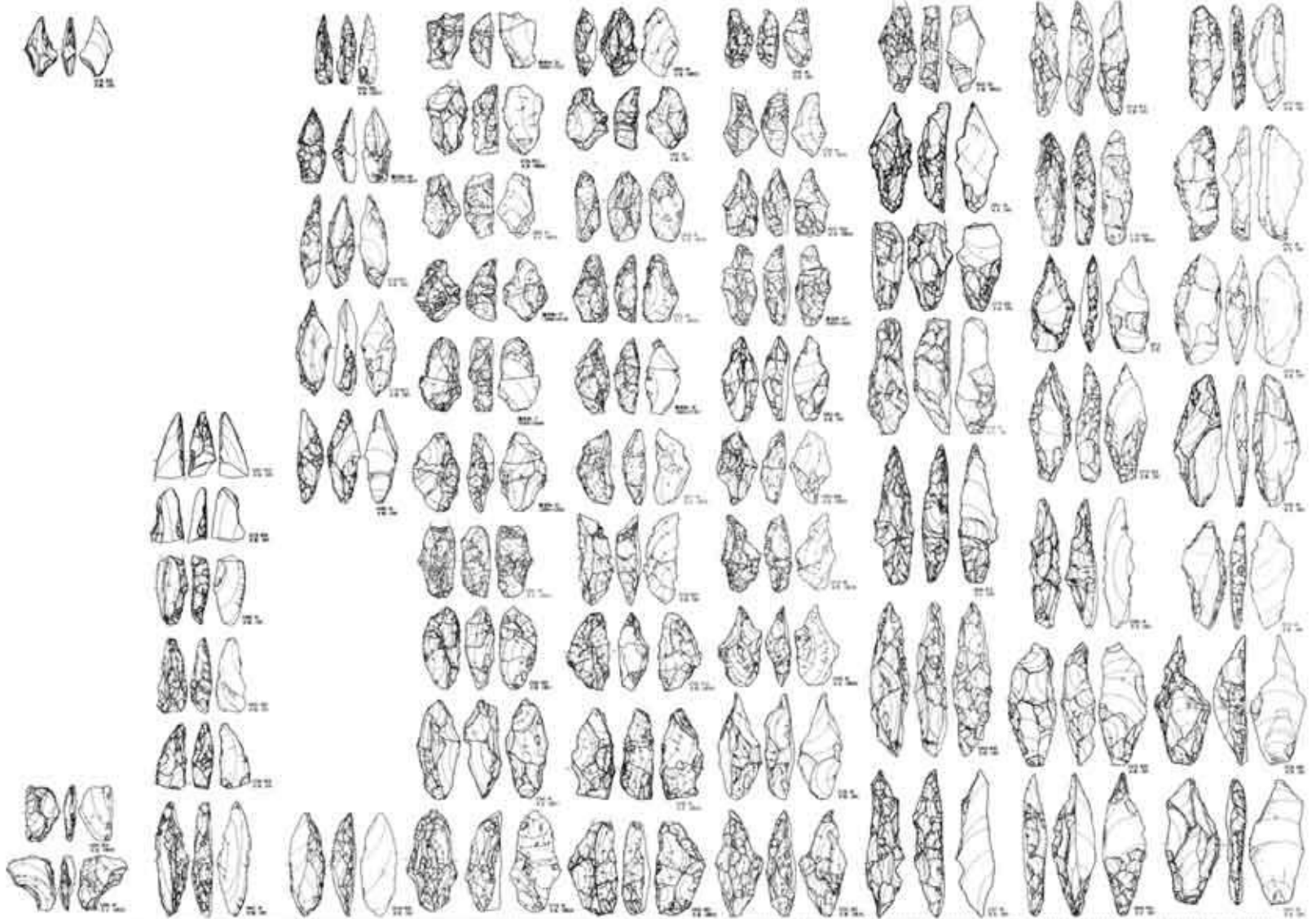
第 V 文化層



第 IV 文化層



第 III 文化層



第 II 文化層



第 I 文化層

第 10 図 城ヶ尾遺跡出土石器変遷図

材とするが、XⅢ層の角錐状石器等に用いられる石材とは異なるものである。小型の台形石器(595,596,597)が一定割合組成される点はこのエリアの特徴である。

平面的な位置が重複するエリアの石器群の検討から、一部に評価の難しい石器が残るものの、角錐状石器を主体とする石器群と、小型のナイフ形石器を中心とする石器群が分離できることが示されると思う。

これらの結果は、平面的な重複が少ない第Ⅱ文化層第3エリア、第4エリア、第7エリア、第8エリア、第9エリア(玉随の資料は要検討)、第Ⅲ文化層第13エリア、第15エリア、第16エリアの組成内容とも調和する。

次に、第Ⅲ文化層とXⅠ層主体の第Ⅳ文化層の関係をみてみたい。第Ⅳ文化層は位牌等型を含む細石刃核と小型ナイフ形石器を中心組成とする。ナイフ形石器と細石刃核の相伴関係については、慎重に評価する必要がある。

第Ⅳ文化層第4ブロックは、第Ⅲ文化層第14エリアと重複しており、ナイフ形石器868,869は下層からの浮き上がりの可能性が高い。黒曜石Ⅰ類を素材とする細石刃石器群が中心になるブロックと判断できる。

第Ⅳ文化層第5ブロックについても、平面的に第Ⅲ文化層第13エリアとの重複関係にある。ただし、ナイフ形石器のほとんどはXⅠ層出土であり、第Ⅲ文化層第13エリアが、本来はXⅠ層を中心とする石器群であることも否定できない。細石刃石器群との関係は別にしても、細身小型の小型ナイフ形石器群が第Ⅲ文化層のナイフ形石器群から分離できる可能性があり、従来と同様に第Ⅳ文化層の石器群として取り扱っておきたい。

第Ⅳ文化層第1エリアは細石刃石器群とナイフ形石器、角錐状石器を含む。下層からの浮き上がりが多く含まれるものとみられる。

第Ⅴ文化層については第1エリアに細石刃石器群がまともな出土状況であり、下層からの浮き上がり資料がかなり含まれるものと考えている。

以上の検討の結果、再構成した各文化層の石器群の組成は、おおむね第10図のようになる。

次に、城ヶ尾遺跡の旧石器時代石器群を代表づける角錐状石器について、検討を行いたい。

4 角錐状石器のリダクションと分類の問題について

阿部は、城ヶ尾遺跡の角錐状石器について、リダクションを考慮した評価を行った(阿部 前掲)。阿部の主張は、角錐状石器の製作・再生に伴うリダクションが、角錐状石器の最終形態に影響を与える重要な要素であることを強調するものである。

角錐状石器の最終形態に、リダクション・プロセスが作用するという阿部の指摘は重要であった。これまでの筆者らの分類にもそのような視点は欠けており、阿部の指摘を考慮に入れた再検討が必要になる。

ただ、阿部が例示する資料には、阿部自らが指摘するように、素材利用の面からも、形態変遷の面からも素直な連続性を認めることは出来ない。石器のリダクション・プロセスについて、より確かな結論を得るためには、同一石材の、変形過程を追証しうる製品群を抽出して検討を行う必要がある。「ブランクの整形から機能部の作出を経て、ある一定の機能を充足できそうな状態に至ってもなお整形が継続している」という阿部の指摘は、城ヶ尾遺跡の角錐状石器のある一群については、核心を突く指摘であるが、あとでみるように、城ヶ尾遺跡の角錐状石器に見られる形態的変異は、一概にそのようなリダクションのみで説明できるものではない。

また、阿部は石器形態に影響を与えるリダクションを、「側縁を狭めるタイプ」と「長軸方向を縮小するタイプ」に整理する。前者は「仮に刺突具の生産を企図しているのであれば、製作の過程としても捉えうる」ものとし、後者は「刃部の鈍磨や先端部の破損などの事態に応じて適用され(中略)殆どの場合が器体の再加工過程であると予測される」とする。前者が製作工程の一部を取り込む場合があるのに対し、後者はより管理的性格の強い調整加工ということになる。

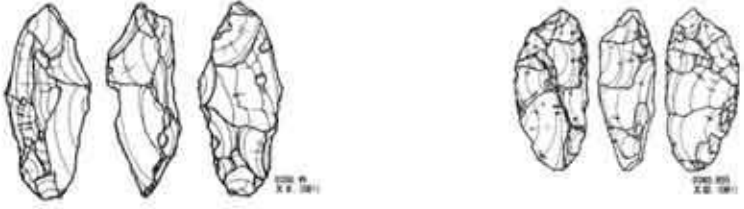
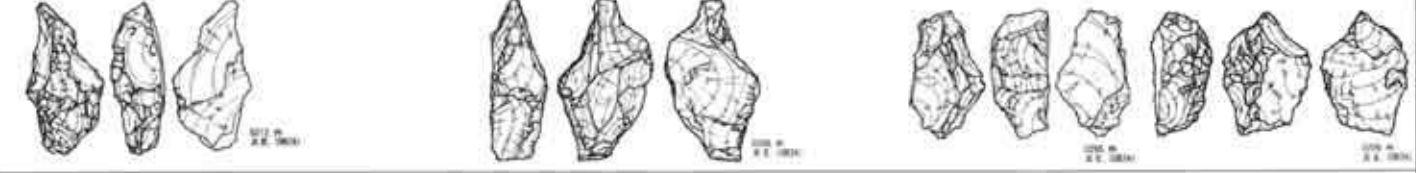
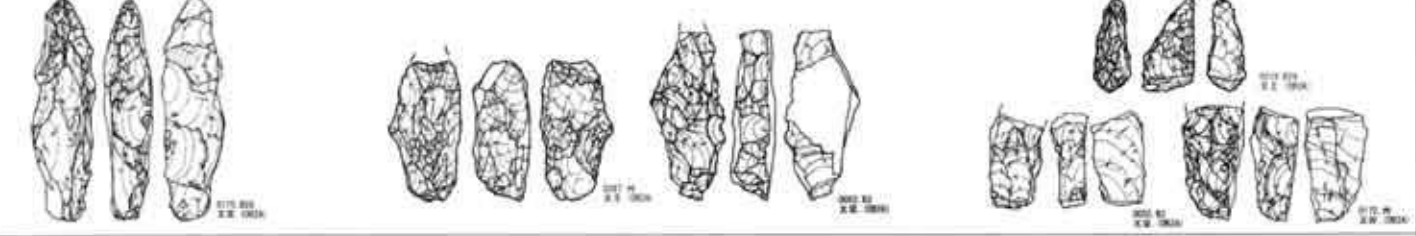
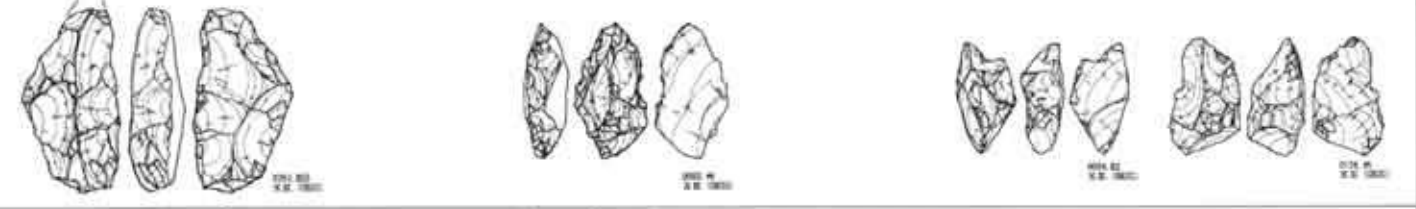
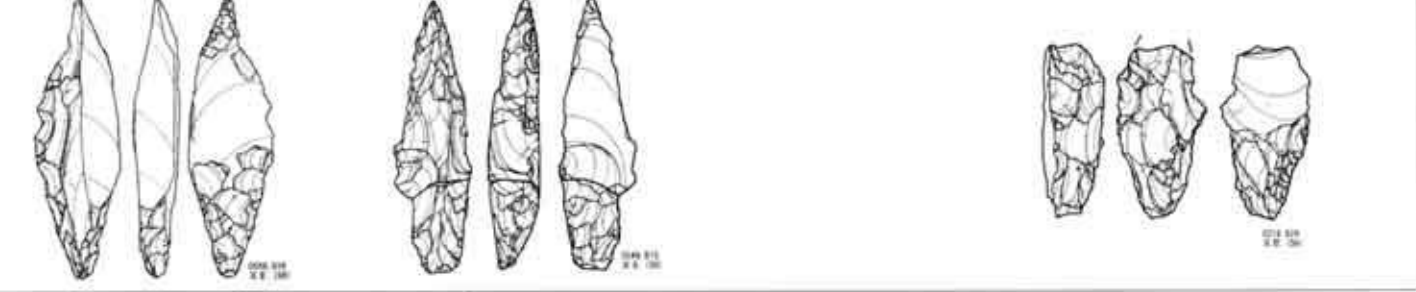
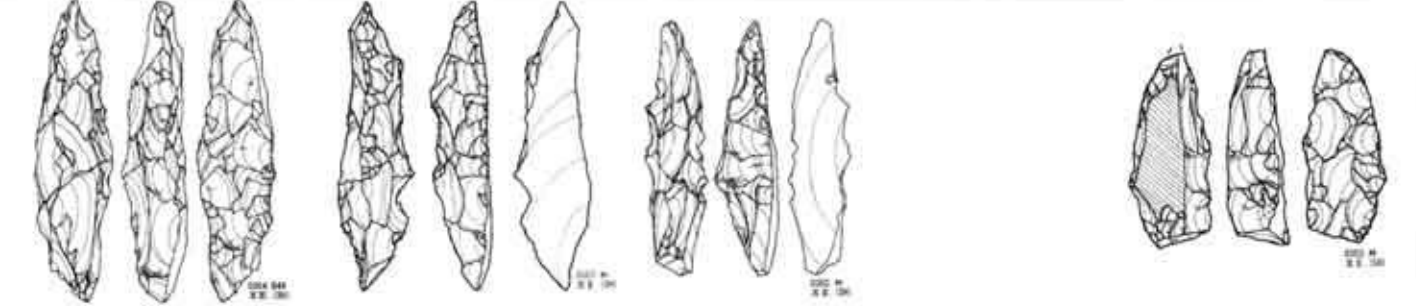
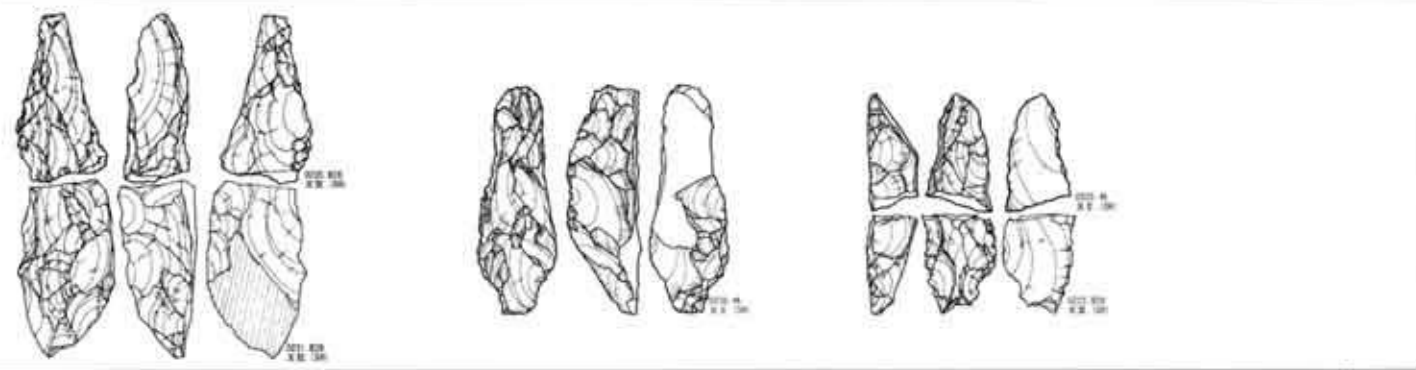
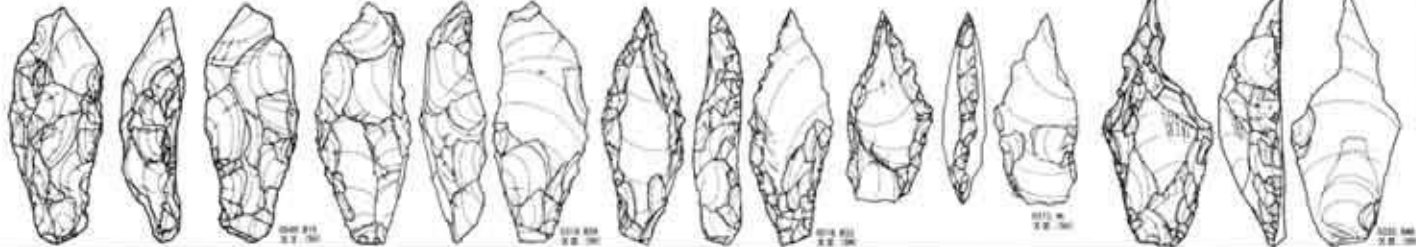
阿部はこの二つのリダクションについて、段階性を意識しながらも明確な区分を避けている。確かにこれらは、阿部が指摘するように、ある面では状況に応じて交互に用いられるものに相違ないし、場合によっては不可分な場合もあろう。しかし、多様な形態的変異が認められ、ともすれば異なる機能が想定されるような石器群を峻別する場合において、「一定の機能を充足しうる段階」に至る整形加工と、その後の管理的性格の強い調整加工を分けて評価することは、製品の形態的バリエーションの評価に全く異なる意味合いを与えるため、重要である。

そもそも、このような問題は、報告書に実資料を掲載する段階で検討しなくてはならない課題であった。報告書に十分反映できなかった反省も含め、ここで石材別に資料群を検討してみたい。

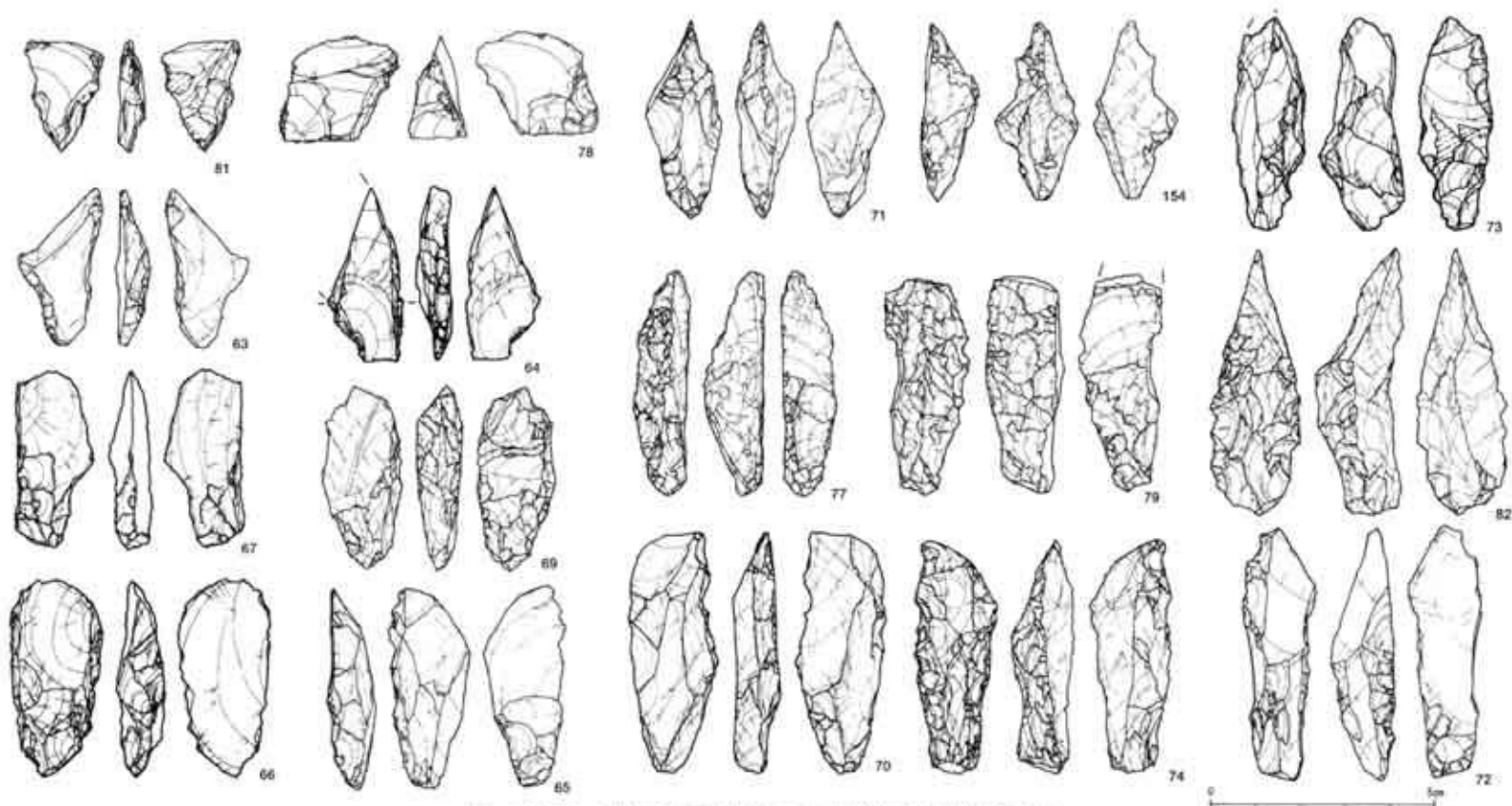
第11図には、素材の利用形態や形態的連続性を考慮して、石材別に想定しうるリダクション・プロセスに沿って、代表的な資料を示した。

黒曜石Ⅰ類は2点の角錐状石器(358,360)があり、形態的には角錐状石器Ⅱ類に分類される。これらは裏面のほぼ全面に腹面加工が施されており、素材の形状やリダクション過程を窺い知ることは出来ない。また、第11図には示さなかったが、調整剥片が接合し極度にリダクションが進行した資料がある(接合No.67)。358,360からの連続性は認められないが、このような資料からリダクションによる変形過程を予測することは出来るだろう。

黒曜石Ⅱ-A類は、本遺跡で最も多く使用されている石材である。製作される角錐状石器はⅡ類が多く、数

リダクション	→		
II類 (黒曜石I類)			
II類 (黒曜石II-A類)			
I類 (黒曜石II-A類)			
II類 (黒曜石II-C類)			
I類 (頁岩I-B類)			
I類 (頁岩I-A類)			
I類 (頁岩II類)			
III類 (頁岩I類ほか)			

第11図 城ヶ尾遺跡における角錐状石器の分類とリダクション例



第12図 前原和田遺跡の角錐状石器関連資料

は少ないがI類も製作されている。各々の形態でリダクションによる変形過程を示す資料が検出できる。このうち、主体を占める角錐状石器II類はほとんどが横広の剥片を素材とする。素材剥片のサイズを推定可能な資料も少なくなく、当初形態で40mm前後の製品が主流である。

一方、角錐状石器I類は腹面加工のために、素材形状を窺い知ることが難しいが、最大長は60mm前後になるものが多い。腹面加工や基部付近のプロポーシオンから、287.52.172.219等がリダクション過程を示す可能性がある。52は調整剥片と接合しており(接合No.56)、阿部が指摘するように、先端部付近へのリダクションを示すものと判断したい。

黒曜石II-B類は、第II文化層第10エリアに分布が集中する。図示していないが角錐状石器I類を志向して破断した資料が含まれている。

黒曜石II-C類は、黒曜石石材の中では黒曜石II-Aにつぐ石材である。363のようなやや大ぶりの資料もあるが、基本的には50のようなやや小型の資料が目立つ。製品はほとんどが横広の剥片を素材とし、形態的には角錐状石器II類に分類される。先端部付近にリダクションを受け、矮小化されて最終形態に至る製品が多い。

頁岩I類は、角錐状石器I類とIII類に利用されている。リダクション過程を十分に復元することは出来ないが、当初形態で最大長は60mm～70mm程度になる。なお、角錐状石器I類と角錐状石器III類をつなぐような資料はみられず、本遺跡では両者はそれぞれ別のリダクション過程をたどるものと考えられる。

頁岩II類は大型の石核も散見され、特徴から在地系の石材と判断できる。製品は角錐状石器I類が多いが、形

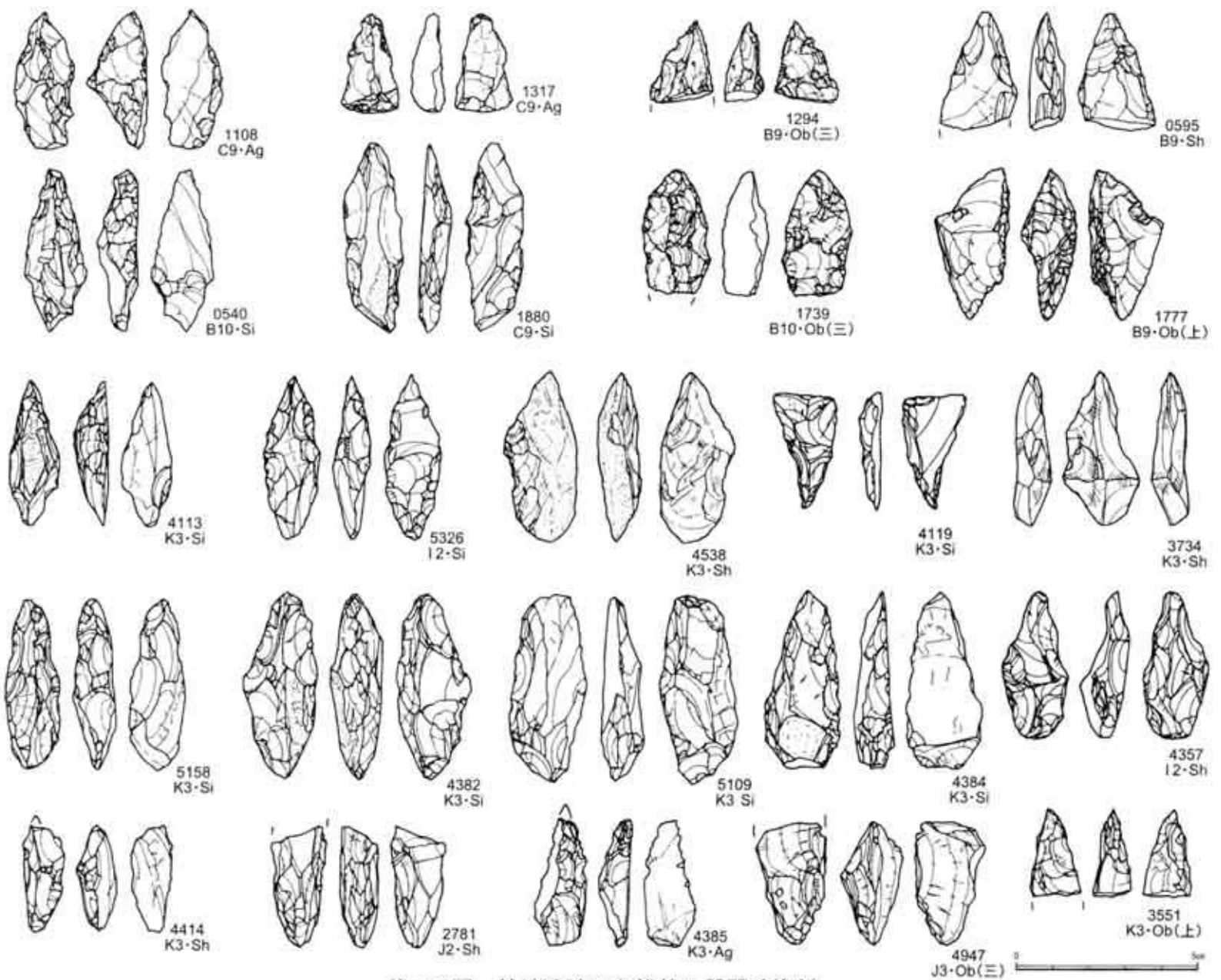
態的には角錐状石器II類に分類されるものもある。製品の当初形態で60mm前後のものを志向し、238+244等の資料の存在から、リダクションによって徐々に器長を減じていくものと、当初から器長が60mm前後とやや器長が短いもの(112.222+225)がある。両者が製作段階で意識的に分離されたものかどうかは判断できないが、素材的な規制が少なからず影響していることは理解できる。222+225等は先端部付近に細かな剥離が観察され、リダクションによる形態変化を予測できる。

以上の検討から、リダクションによって形態的に変化するものが少なくないことは確認できた。しかし、一方で城ヶ尾遺跡の角錐状石器の中には製作当初から最大長が40mm前後に収まるものが少なくなく、リダクションによる器長の変化を考慮してもなお、石材によって製作される製品形態には明確な差異が認められる。

結果として、城ヶ尾遺跡にみられる角錐状石器の形態的バリエーションは、阿部が指摘するようなリダクション・プロセスのみで説明されるものではない。やはり当初から指摘するように、素材の形状と石材に対応した石器製作技術の選択があり、それをベースにリダクション・プロセスを考慮するのが適当であると考えられる。

むしろ重要視すべきなのは、製品の形態や石材によって、看取されるリダクションに位相差がある点である。

つまり、黒曜石II-A類やII-C類を素材とする角錐状石器では非常に顕著なリダクションを認めうる一方で、頁岩I類を素材とする角錐状石器I類には、ほとんど認ることができない。頁岩II類を素材とする角錐状石器I類には、ある程度のリダクションを示す証拠があり、角錐状石器III類についても左右非対称に整形された335な



第13図 帖地遺跡の角錐状石器関連資料

どの存在から、一定のリダクションを想定しうる。

城ヶ尾遺跡の角錐状石器について、製作段階の整形剥離を除き管理的性格の強いリダクションをまとめると、先端部の先鋭化を企図するものと、必ずしも先端部付近の先鋭化を企図しないものに大別できる。前者は、角錐状石器Ⅱ類の212,238等にみられるものであり、角錐状石器Ⅲ類にみられるリダクションもこのタイプである。

一方、後者は角錐状石器Ⅰ類の黒曜石Ⅱ-A類287や頁岩Ⅱ類の238等においてみられる。また、あまり顕著ではないが角錐状石器Ⅱ類の黒曜石Ⅱ-C類50などもこの範疇で理解できる。

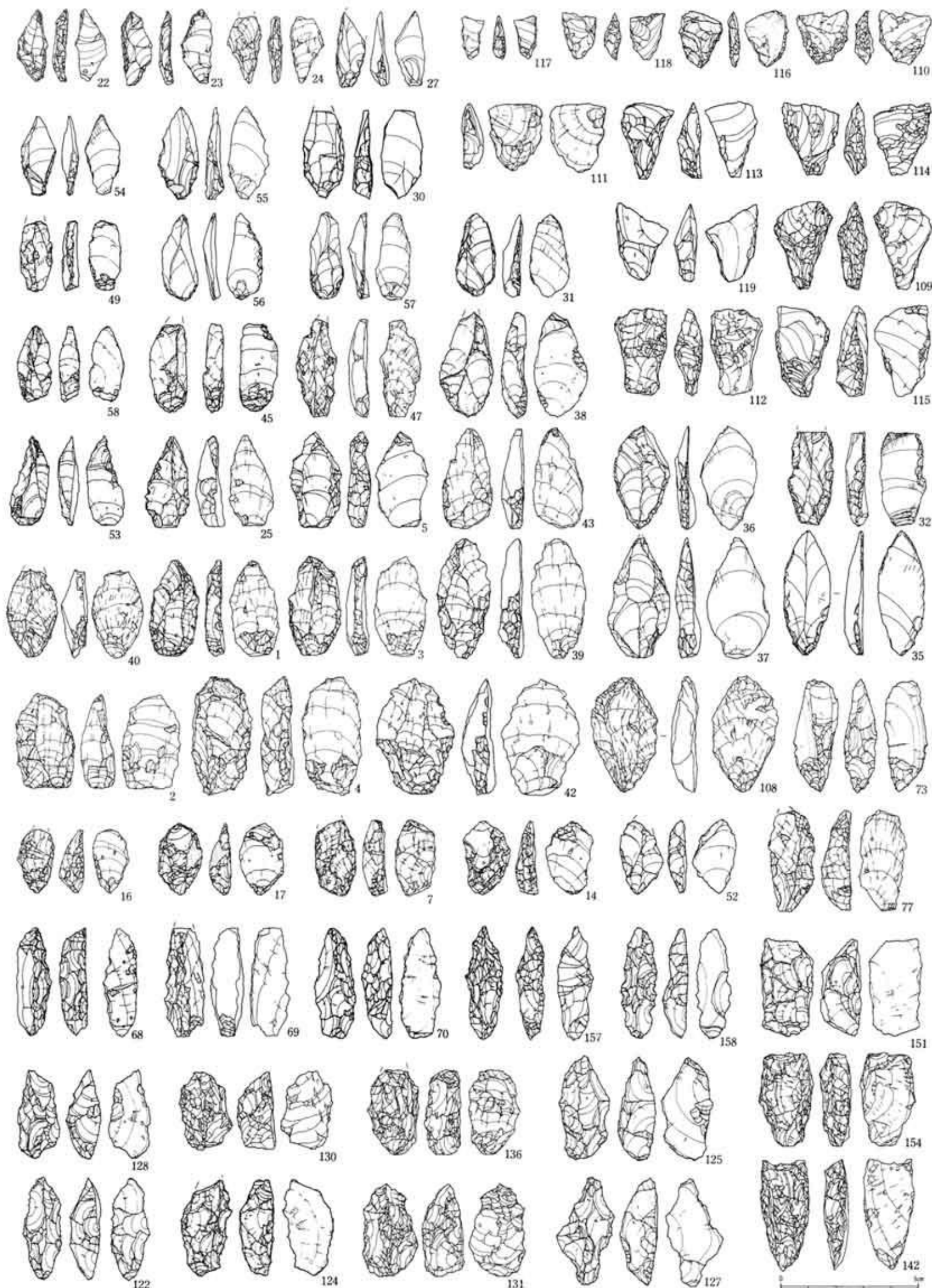
このようなリダクションの差は、少なからず、リダクションが目的とする機能差に由来すると考えられる。先端部を丸める後者の調整は、明らかに刺突具の機能にはそぐわない。むしろ、搔器的な機能を想定した加工と理解した方がよい。このことは、角錐状石器Ⅱ類やリダクションが進行した角錐状石器Ⅰ類の先端部付近に腹面からの細かな剥離痕が観察される場合が多いこと、これらの資料に先端部からの衝撃剥離(例えば御堂島1991)を示す例がほとんどないことから示唆される。

また、後者についても、必ずしも目的が槍先としての刺突具に限られない可能性がある。先端部付近に観察される細かな剥離からは、むしろドリル的な使用を想定しうるものであり、左右非対称の資料や矮小化した資料の存在はこれを補強する。なお、石材によるリダクションの位相差は、石材に対する管理意識の違いを反映するものと考えられる。

これらから、角錐状石器Ⅰ類は槍先としての機能を色濃く残しながらも、リダクションによって加工具に転用される場合があることが推察できる。角錐状石器Ⅱ類については加工具として性格がより強く認められ、角錐状石器Ⅲ類についても、一部は加工具と評価できる。

これらの推論は、現段階で使用痕などの検討を経たものではなく、また槍先としての機能を排除するものでもない。むしろ、加工具としての機能は型式設定の段階(西川・杉野1959)より想定されていたものであり、一見して多様な機能を備え、リダクションによってそれが推定される点は、阿部(前掲)も指摘しているところである。

むしろ、九州において槍先としての機能が想定されてきた一群について、形態的に分離でき、さらにリダクシ



第 14 図 小原野遺跡の角錐状石器関連資料

ンに位相差が認められ、加えて一部に加工具としての機能や転用が想定される点で、注意を要するのである。

5 角錐状石器を含む石器群の位置づけについて

これまでに、城ヶ尾遺跡の石器群について、各文化層の石器群の構成を再検討するとともに、形態別にリダクション・プロセスによる影響の評価を行った。

結果、角錐状石器群と小形ナイフ形石器群は層位的に分離され、角錐状石器群→小形ナイフ形石器群への移行を確認できた。また、リダクション・プロセスによる影響を考慮してもなお、角錐状石器における石材と形態の間には強い相関性が看取でき、さらに石材や形態におけるリダクションの位相差から、角錐状石器の形態間の機能的差異についても示唆できたと思う。

ところで、このような変異はどのような背景によるものであろうか。最後に、これらの石器群を評価するために、県内の同一時期の資料を踏まえながら、筆者なりの考えを記しておきたい。

前原和田遺跡(鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000)

前原和田遺跡は鹿児島県曾於市福山町に所在し、城ヶ尾遺跡に近接する。城ヶ尾遺跡と同じXⅢ層段階で角錐状石器とそれに関連する石器群がまとまって出土した。

石材は、城ヶ尾遺跡の頁岩Ⅱ類に対応する在地系の頁岩が主体を占める。

角錐状石器とナイフ形石器が出土しており、ナイフ形石器は両側縁に急角度の調整剥離が施され、基部には腹面加工が観察される。製作技術から角錐状石器との近縁性が窺われる(桑波田 2003)。角錐状石器はⅠ類(73,77,79)とⅡ類(71,154)がみとめられる。ナイフ形石器は角錐状石器Ⅲ類との関連も考えられるところである。

帖地遺跡(喜入町教育委員会 2000)

薩摩半島中部の鹿児島県鹿児島市喜入町に所在する。

XⅡ層～XⅧ層で合計4枚の文化層が確認された。

角錐状石器関連資料では、XⅢ層から頁岩を素材とする資料がまとまって検出されている。資料実見の結果、ほとんどが白色に風化するシルト質頁岩で同一母岩である。横剥ぎの剥片を素材とし、器厚が薄く、腹面加工が顕著に観察できるのがこの遺跡の資料の特徴である。資料実見の際いくつかは接合し、製品の当初形態で最大長が40mm前後のものが多い。特に3734+4357は3734の剥離後4357の先端部付近に複数の剥離痕が観察され、リダクションを繰り返しながら最終形態に至る過程を示す資料として注目される。角錐状石器に伴う石器群ははっきりしないが、最大長が50mmを超えるような大型の資料が存在しない点は本遺跡の角錐状石器群の特徴を示す点として評価できる。

小原野遺跡(大口市教育委員会 2000)

鹿児島県大口市に所在する。日東などの黒曜石原産地

に近く、石核や大型の剥片、ナイフ形石器や角錐状石器を豊富に組成し、原産地遺跡として評価できる。

ナイフ形石器は報告者によって、主に二次加工部位によってⅢ類に分類されているが、素材剥片の形状や利用石材を考慮すると、各石器群の特徴をより明確に抽出できる。報告者の分類とやや異なる点もあるので、各石器群の代表的な資料を第14図に示しながら検討する。

22,23,24,27は小型の一側刃または二側刃加工の小型ナイフ形石器である。切出形の形状を意識したものが多く、珪質頁岩や黒曜石Ⅲ類を主体とする。形態や石材利用の点から抽出が可能である。117,118,116,110は小型台形石器であり、黒曜石Ⅲ類を主体とするものである。109,112,115等の台形石器はチャートや黒曜石Ⅱ類、頁岩などを使用しており、製品のサイズや石材利用の観点から、やはりこれらは分離することができる。

54,55,30,49,56,57,31等は連続的に剥離された縦長の小型剥片を素材とするもので、基部と先端部に部分的な加工が看取される。灰色の良質な頁岩を主体とする。

同じく40,1,3,39など、4段目から6段目に示した資料は、縦長の剥片を素材とするナイフ形石器である。54,55等の灰色の頁岩を素材とする一群と比べてやや大きめの資料が多く、黒曜石Ⅱ-A類を素材とするものが多い。バリエーションも認められるが、基本的には連続剥離された縦長剥片を素材としており、基部付近を中心に側縁に二次加工が施される。

同じく2,4,42,108等はさらに大型の資料であるが、やはり縦長ないし素材を縦位に利用する点で共通の基盤に属する石器群である。潤沢な石材供給を反映した原産地遺跡特有のバリエーションと理解できるかもしれない。

8段目はやや評価の難しい一群であるが、基本的には縦置き素材利用であり、連続剥離された縦長剥片を素材とするナイフ形石器の最終形態を示す可能性がある。

68,69,70,157,158,128,130,136,125,122,124,131,127は角錐状石器である。このうち69,70,157,158はチャートを素材とするものであり、黒曜石Ⅱ-A類を素材とする68,122とあわせて、形態的に一括性の高い一群である。68,69,70,158については、横長の剥片を素材とする点が特徴的であり、城ヶ尾遺跡の角錐状石器Ⅱ類に対応する。先端部にリダクションが看取できる資料が散見されることには注意を要する。154,142はやや薄手の剥片を素材とする周縁加工石器である。側縁に急角度の二次加工を施し、先端部方向からの調整が特徴的に看取できる。

小原野遺跡の角錐状石器は、最大長が40mm前後であり、城ヶ尾遺跡に見られるような最大長が60mm前後の角錐状石器Ⅰ類やⅢ類を含まない。また、素材は例外はあるものの、基本的には横長の剥片を利用している。

石材供給が潤沢な原産地遺跡において大型の資料が見られない点は重要であり、南九州の角錐状石器の地域的

な特徴を示すものか、あるいは大型の刺突具を組成しない時期的な特徴と理解できる。

小原野遺跡を特徴づけるのは、角錐状石器と連続剥離された縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。宮田栄二は、基部と先端部に加工を施し、全体形を木葉形に仕上げる一群を「小原野型尖頭器」と呼び、終末期の小形ナイフ形石器群の前段階に位置づけた(宮田 2005)。

これらの縦長剥片を素材とするナイフ形石器は、基部に調整を施すのが基本であるが、素材の形状によっては、側縁全体や先端部付近に加工を施す場合もある。基部加工を基本としながらも、素材の形状等に応じて柔軟な二次加工を施している。

縦長剥片を連続的に剥離する技術は、同遺跡で報告されている円錐形の石核の(例えば271,272等)存在によって、ある程度確立された技術基盤に則ったものと評価できる。横剥ぎの剥片を素材とする角錐状石器の素材生産技術と、縦長剥片を連続的に剥離するナイフ形石器の製作技術の違いは極めてはっきりしており、両石器群は少なくとも技術的には明確に分離できる。

6 まとめ

城ヶ尾遺跡の石器群の再検討によって、第Ⅱ文化層→第Ⅲ文化層において角錐状石器を含む石器群→小型ナイフ形石器を含む石器群への移行が層位的に確認できた。

角錐状石器については、リダクションによる形態変異の影響を評価してもなお、石材と形態には強い相関関係が看取され、また、先端部付近にみられる剥離痕の特徴やリダクションの評価、先端部の破断方向の傾向から、一部には槍先としての機能に加えて加工・調整具としての機能を色濃く推定できる。同様の要素は帖地遺跡や小原野遺跡の角錐状石器にも見出すことができ、少なくとも南九州では、一定の傾向として捉えられる。

また、城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層→第Ⅲ文化層にみられる石器群の変化は、同時に素材の横位利用→縦位利用への変化と換言できる。石核形態の違いはさておき、連続剥離した縦長剥片に部分的な加工を施す小原野遺跡のナイフ形石器の一群は、縦長剥片の連続剥離と素材の縦位利用、基部を含む部分加工という点で、東九州においてナイフ形石器文化終末期に位置づけられる基部・先端部加工のナイフ形石器との技術的関連性を指摘できる。双方に類似する資料は城ヶ尾遺跡第Ⅲ文化層にも散見されることから、小原野遺跡の石器群は城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層→第Ⅲ文化層にみられる素材利用の変化をつなぐ位置に評価できるだろう。現段階では地域的な特徴を反映したものである可能性は捨てきれないものの、小原野遺跡における角錐状石器Ⅰ類の不在もこれを補強する要素と考えられる。以上から、角錐状石器→縦長剥片を素材とするナイフ形石器→小型ナイフ形石器への変遷を考えておき

たい。

併せて、南九州における角錐状石器Ⅰ類の減少と角錐状石器Ⅱ類の盛行は、当該地域における生業相の特徴とそれに適応する石器群の動態を反映している可能性がある。松本茂は、南九州の角錐状石器を含む石器群から小型ナイフ形石器が盛行する段階を「大型利器需要低減説」とそれに続く「選択石材影響説」として構造的な評価を与えた(松本 2005)。城ヶ尾遺跡などにみられる角錐状石器の諸相は、そのような角錐状石器盛行期→小型ナイフ形石器への構造的変化を既に内包するものと評価できる。角錐状石器の系譜や変遷、関連する石器群との関係、角錐状石器の使用痕に基づく機能推定、地域の特徴の抽出等を再度踏まえたより詳細な検討が必要になるが、これらについては機会を改めて論じることにしたい。

最後になりましたが、宮田栄二・桑波田武志氏はじめ、阿部敬、松本茂、藤木聡、立神勇志の各氏には貴重なご意見を頂きました。また、資料実見に際し鹿児島市教育委員会、大口市教育委員会の担当者の方々には大変お世話になりました。末文ながら、記して御礼申し上げます。

【引用・参考文献】 ※報告書は紙数の都合上割愛した。

- 阿部 敬 2005 「“剥片尖頭器”はなぜ消えたか？」『物質文化』79
- 岩谷史記 1997 「九州尖頭器石器群の中にみる三稜尖頭器の編年的位置」『九州旧石器』3号
- 織笠 昭 1987 「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』22
- 桑波田 武志 2003 「鹿児島県におけるナイフ形石器文化後半期の研究」『縄文の森から』創刊号
- 橋 昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『史学論叢』3
- 西川 宏・杉野 文一 1959 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』3
- 萩原 博文 1994 「九州における角錐状石器の編年と地域的特徴」『古代文化』46-9
- 馬籠亮道・長野真一 2004 「角錐状石器の製作技術について」『九州旧石器』8
- 馬籠亮道 2005 「鹿児島県における東九州自動車道関連遺跡の調査成果」『九州旧石器』9
- 松田 清孝 2003 「小丸川流域産石器石材の同定」『宮崎県総合博物館研究紀要』25
- 松本茂 2005 「九州地方の“ナイフ形石器文化終末期”とその前後」『石器文化研究』12
- 御堂島 正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92
- 宮田 栄二 2005 「鹿児島の旧石器時代」『黒潮を渡った旧石器時代の人びと』講演会資料